山元町文化財調査報告書第８集

日向北遺跡

－常磐自動車道（県境～山元間）建設工事に係る発掘調査報告書Ⅲ－

日向北遺跡 竪穴住居跡 出土土器

平成２６年３月

宮城県山元町教育委員会

東日本高速道路株式会社 東北支社 仙台工事事務所

序　　文

山元町は古くから身近に豊かな海と山を擁し、人々は恵まれた自然の中で生活を営んできました。その足跡は埋蔵文化財として、町内各地に散在しております。埋蔵文化財は、文献などには記録されていない地域の歴史を解明できる貴重な歴史資料であります。これらの遺跡は、先人が残した生活の証でもあり、かけがえのない文化遺産として将来の人々に継承するとともに、現在の生活の中において積極的に活用していくことが、私たちに課せられた責務であると考えております。

しかし、土地利用と深く結びつきの強い埋蔵文化財は、絶えず開発事業によって破壊・消滅の危機にさらされております。このため、当教育委員会としては、開発関係機関等との協議を通してこのような貴重な文化財を保存し、後世に伝えることに努めているところであります。

今回の日向北遺跡の調査は、常磐自動車道（県境～山元間）建設工事に際し、事業主との協議・調整に基づき、平成24年度に当教育委員会が実施したものであります。今回の発掘によって、古墳時代～中・近世の人々の生活の跡が確認され、山元町の歴史を考える上で貴重な発見となりました。

本書は、この調査成果を収録したもので、地域における歴史解明の資料として広く活用され、埋蔵文化財の保護と理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際しご協力をいただいた関係機関の方々、また、直接調査にあたられました皆様に心から感謝申し上げます。

平成２６年３月

山元町教育委員会
教育長　森　憲一

例　言

1．本書は、宮城県亘理郡山元町山寺字日向地内に所在する日向北遺跡（第１次調査）の発掘調査報告書である。

2．本遺跡の発掘調査は、常磐自動車道（県境～山元間）建設工事に伴う事前調査として行ったものである。発掘調査・整理作業・報告書作成に係る一連の業務は、平成 22 ～ 25 年度に、調査原因となった事業主体者である東日本高速道路株式会社東北支社仙台工事事務所から業務委託を受けた山元町が実施した。

3．本遺跡の発掘調査と整理作業は、山元町教育委員会が主体となり、文化財担当部局のある生涯学習課が担当した。日向北遺跡の現地発掘調査・報告書作成業務を行った平成 23 ～ 25 年度の職員体制は下記のとおりである。

教育長	森　憲一
課長	渡邊 隆弘（H23）、齋藤 三郎（H24・25）
班長	武田 賢一
主事	山田 隆博
主事	丹野 修太（任期付職員）
調査補助員	藤田 祐、渡邊 理伊知（H23・24）、佐伯 奈弓
発掘作業員	石井 進、伊藤 清、及川 博子、関沼 邦彦、立谷 重晴、舘内 和子、南條 義博、武者 新一、森 忠男、矢吹 共子
整理作業員	梅村 眞智子、及川 博子、斉藤 則彦、西山 ゆり子、永谷 佳歩美、高橋 みゆき、萩本 厚子、橋本 礼子、橋元 和子、深澤 久美、三浦 則子、水本 惠子、矢吹 共子、渡邊 洋子

4．発掘調査、報告書作成に際して、以下の方々からご指導・ご助言・ご協力を賜った。
天野 順陽・村田 晃一・村上 裕次・初鹿野 博之（宮城県教育庁文化財保護課）、
石本 弘（福島県文化振興事業団）、日下 和寿（白石市教育委員会）、佐藤 敏幸（東松島市教育委員会）、
鈴木 朋子（亘理町教育委員会）、辻 秀人（東北学院大学）、森 秀之（恵庭市教育委員会）、
草場 啓一・小鹿野 亮（筑紫野市教育委員会）、宮城県教育庁文化財保護課、
東日本高速道路株式会社東北支社仙台工事事務所（敬称略）

5．現地発掘調査について、指揮・監督を丹野・渡邊が担当し、現地作業を発掘作業員、断面図の作成は及川・矢吹が行った。

6．本書の整理・作成にあたり、遺物の洗浄・注記・接合・復元・拓本は、佐伯が中心となり整理作業員がこれを助けた。遺物抽出については山田が担当した。
遺物の実測図作成は山田、土器実測図のトレースは佐伯が行った。また、土器類の一部は、（株）シン・技術コンサルに委託し、実測図を作成した。遺物写真撮影・加工は（株）アートプロフィールに委託した。
遺構整理については、全般を山田・丹野が担当し、断面図トレース、データ入力・校正を佐伯、図面修正・データ照合を佐伯・渡邊（洋）・及川が行った。

7．本書で使用した測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅹ系による。調査区の測量原点は以下のとおりである。方位は座標北を表している。なお、今回使用した座標値は、東日本大震災前の値を基本としており、震災後のＸ・Ｙ座標の補正データは（　）内の数値のとおりである。
L744：X=－225195.532（－225196.210）　Y=3117.700（3120.755）　Z=25.880m（標高値）
L745：X=－225175.225（－225175.903）　Y=3119.226（3122.283）　Z=30.752m
※補正データの計算は、地殻変動に伴う座標値補正を行う座標補正ソフトウェア「PatchJGDtouhokutaiheiyouoki2011.par」による。

8．本書の第２図は、土地分類基本調査における 1/50,000 地形分類図「角田」をもとに作成したものである。
9．本書の第３図は、国土交通省国土地理院発行の 1/50,000 の地形図を複製して作成したものである。
10．本書で使用した土色の記述にあたっては、「新版標準土色帳 2010 年版」（小山・竹原 1973）を参照した。
11．本書で使用した遺構略号は、「発掘調査の手引き」（文化庁文化財部記念物課 2010）を参考にし、以下の通りとした。
　ＳＩ：竪穴住居跡、ＳＢ：掘立柱建物跡、ＳＡ：柱穴列跡、ＳＤ：溝跡、ＳＫ：土坑、Ｐ：柱穴・小穴
12．出土遺物の登録番号は、以下の通りとした。
　Ｃ：土師器、Ｅ：須恵器、Ｆ：土製品、Ｇ：瓦、Ｉ：陶器、Ｊ：磁器、Ｋ：石器、Ｎ：鉄製品、Ｏ：製鉄関連遺物
　　※今回図化（抽出）した遺物は、Ｃ：土師器、Ｅ：須恵器、Ｆ：土製品のみ
13．遺構・遺物実測図の主な縮尺は下記のとおりで、それぞれ図中にスケールを付して示した。
　調査区全体図：1/300、竪穴住居跡：1/50、掘立柱建物跡：1/100・1/200、柱穴列跡：1/100
　溝跡・土坑：1/40、断面図：1/40・1/50、土器類：1/3
14．遺物実測図において、土器類の実測図については、須恵器断面を黒塗り、その他の土器を白抜きとした。また、黒色処理が施された土師器については、スクリーントーンにより示した。
15．本書の出土遺物のうち、土師器については、成形にロクロを使用したものをロクロ成形・ロクロ土師器、ロクロを使用していないものを非ロクロ成形と呼ぶことにした。
16．基本層序は、ローマ数字とアルファベット小文字を組み合わせて表記した。
17．標高は、水準点を基にした海抜高度で示した。
18．遺構内の傾斜の部分は「 ┳┳ 」、後世の撹乱は「撹」と表記しその傾斜部は「 ╦ 」で示した。
19．その他、発掘調査の方法等については、第Ⅲ章２にまとめた。
20．本書の執筆・編集については、整理を担当した調査員の協議を経て、第Ⅰ章～第Ⅲ章３(1)・第Ⅳ章１・３は山田、第Ⅲ章３(2) ～ (6)・第Ⅳ章２は丹野が執筆し、図版の版組み・報告書編集は山田が行った。
21．本遺跡の調査成果については、現地説明会等でその内容の一部を公開しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、本書がこれらに優先する。
22．発掘調査に伴う出土遺物および写真等の調査記録資料については、山元町教育委員会が保管している。

日向北遺跡　発掘調査の様子

調　査　要　項

遺 跡 名：**日向北（ひゅうがきた）遺跡**　（宮城県遺跡地名表登載番号 14108　遺跡記号 HGK）

所 在 地：宮城県亘理郡山元町山寺字日向

調査原因：常磐自動車道（県境～山元間）建設工事に係る事前調査

調査期間：確認調査　平成 24(2012)年 2 月 16 日～ 2 月 28 日

　　事前調査　平成 24(2012)年 5 月 1 日～ 6 月 26 日

調査面積：約 1,460 ㎡

調査主体：山元町教育委員会

調査担当：山元町教育委員会生涯学習課

調 査 員：丹野　修太　【山元町教育委員会　生涯学習課　主事（任期付職員）】

　　渡邊　理伊知【山元町教育委員会　生涯学習課　臨時職員（調査補助員）】

調査協力：宮城県教育庁文化財保護課、東日本高速道路株式会社東北支社仙台工事事務所

日向北遺跡　発掘調査の様子

目　次

序文
例言・調査要項
目次・挿図目次・表目次

第Ⅰ章　遺跡の概要 …… 1
1．遺跡の位置と地理的環境 …… 1

2．周辺の遺跡 …… 1

第Ⅱ章　調査に至る経緯と調査の経過 …… 7
1．常磐自動車道（県境～山元間）建設工事計画と発掘調査に至る経緯 …… 7
（1）調査に至る経緯 …… 7
①路線内の埋蔵文化財の取り扱い決定までの経緯　②文化財保護法に基づく手続き
（2）施工路線内の発掘調査の経過 …… 8

2．日向北遺跡発掘調査の経過 …… 8

第Ⅲ章　発掘調査 …… 11
1．基本層序 …… 11

2．発掘調査の方法 …… 12

3．発見された遺構と遺物 …… 14
（1）竪穴住居跡 …… 16
（2）掘立柱建物跡・柱穴列跡 …… 31
①掘立柱建物跡・柱穴列跡の立地　②掘立柱建物跡　③柱穴列跡
（3）溝跡 …… 40
（4）土坑 …… 41
（5）ピット …… 44
（6）遺構検出面、排土等出土遺物 …… 44

第Ⅳ章　総括 …… 48
1．出土遺物の特徴と時期 …… 48
（1）土師器 …… 49
（2）須恵器 …… 52
（3）その他の遺物 …… 52

2．検出した遺構の特徴と時期 …… 53
（1）竪穴住居跡 …… 53
（2）掘立柱建物跡・柱穴列跡 …… 57
（3）溝跡 …… 58
（4）土坑 …… 58
（5）ピット …… 58
（6）まとめ …… 58

3．まとめ …… 60

引用・参考文献
報告書抄録

挿図目次

第１図　山元町と日向北遺跡の位置 ・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２図　日向北遺跡周辺の地形分類図 ・・・・・・・・・・・・・・2
第３図　山元町内の遺跡分布と常磐自動車道関連遺跡・・・・・・・5
第４図　調査区の位置 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
第５図　日向北遺跡基本層序 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第６図　日向北遺跡遺構配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第７図　日向北遺跡調査区全景 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
第８図　ＳＩ１竪穴住居跡（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・17
第９図　ＳＩ１竪穴住居跡（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・18
第１０図　ＳＩ１竪穴住居跡（３）・・・・・・・・・・・・・・・・19
第１１図　ＳＩ２竪穴住居跡（１）・・・・・・・・・・・・・・・・21
第１２図　ＳＩ２竪穴住居跡（２）・・・・・・・・・・・・・・・・22
第１３図　ＳＩ２竪穴住居跡（３）・・・・・・・・・・・・・・・・23
第１４図　ＳＩ２竪穴住居跡（４）・・・・・・・・・・・・・・・・24
第１５図　ＳＩ３竪穴住居跡（１）・・・・・・・・・・・・・・・・26
第１６図　ＳＩ３竪穴住居跡（２）・・・・・・・・・・・・・・・・27
第１７図　ＳＩ３竪穴住居跡（３）・・・・・・・・・・・・・・・・28
第１８図　ＳＩ４竪穴住居跡（１）・・・・・・・・・・・・・・・・29
第１９図　ＳＩ４竪穴住居跡（２）・・・・・・・・・・・・・・・・30
第２０図　掘立柱建物跡・柱穴列跡遺構配置図・・・・・・・・・31
第２１図　ＳＢ１～７掘立柱建物跡（１）・・・・・・・・・・・・32
第２２図　ＳＢ１掘立柱建物跡平面・断面図・・・・・・・・・・・34
第２３図　ＳＢ２掘立柱建物跡平面・断面図・・・・・・・・・・・34
第２４図　ＳＢ３掘立柱建物跡平面・断面図・・・・・・・・・・・35
第２５図　ＳＢ４掘立柱建物跡平面・断面図・・・・・・・・・・・35
第２６図　ＳＢ５掘立柱建物跡平面・断面図・・・・・・・・・・・36
第２７図　ＳＢ６掘立柱建物跡平面・断面図・・・・・・・・・・・36
第２８図　ＳＢ７掘立柱建物跡平面・断面図・・・・・・・・・・・36
第２９図　ＳＢ１～７掘立柱建物跡（２）・・・・・・・・・・・・37
第３０図　ＳＡ１～３柱穴列跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
第３１図　ＳＤ１溝跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
第３２図　ＳＫ１土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
第３３図　ＳＫ２土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
第３４図　ＳＫ３土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
第３５図　ＳＫ４・５土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
第３６図　ＳＫ４・５土坑、調査区検出面出土遺物（１）・・・・・・45
第３７図　ＳＤ１溝跡、ＳＫ１・２・３土坑 ・・・・・・・・・・・46
第３８図　ＳＫ４・５土坑遺物出土状況 ・・・・・・・・・・・・・47
第３９図　ＳＫ４・５土坑、調査区検出面出土遺物（２）・・・・・・47
第４０図　日向北遺跡出土土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
第４１図　宮城県内の検れる周溝をもつ竪穴住居跡の分布 ・・・・・55
第４２図　宮城県内の検れる周溝をもつ主な竪穴住居跡 ・・・・・・56
第４３図　日向北遺跡時代別遺構配置図 ・・・・・・・・・・・・・59

表目次

第１表　常磐自動車道建設計画に伴う関連遺跡・地点一覧・・・・・6
第２表　その他の山元町内の遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・6
第３表　ＳＩ１竪穴住居跡床面施設一覧・・・・・・・・・・・・・16
第４表　ＳＩ２竪穴住居跡床面施設一覧・・・・・・・・・・・・・20
第５表　ＳＩ３竪穴住居跡床面施設一覧・・・・・・・・・・・・・25
第６表　日向北遺跡掘立柱建物跡属性表・・・・・・・・・・・・・33
第７表　日向北遺跡掘立柱建物跡柱穴跡属性表・・・・・・・・・33
第８表　日向北遺跡柱穴列跡属性表・・・・・・・・・・・・・・・38
第９表　日向北遺跡柱穴列跡柱穴跡属性表・・・・・・・・・・・38
第１０表　日向北遺跡溝跡属性表・・・・・・・・・・・・・・・・40
第１１表　日向北遺跡土坑属性表・・・・・・・・・・・・・・・・43
第１２表　日向北遺跡ピット属性表・・・・・・・・・・・・・・・44
第１３表　日向北遺跡遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・48
第１４表　宮城県内の検れる周溝をもつ竪穴住居跡・・・・・・・・55

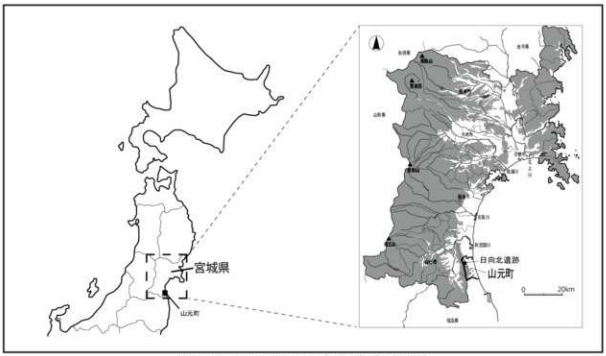
日向北遺跡　発掘調査の様子

第Ⅰ章　遺跡の概要

1. 遺跡の位置と地理的環境

宮城県亘理郡山元町は、仙台市から南南東に約 40km 離れた県南東部に位置し、地理的には仙台平野南端にあたる(第 1 図)。町の西側は福島県から延びる阿武隈山地の支脈、東側は太平洋で、これらの間には沖積地が広がっている。町内を北上する阿武隈山地は、標高 200～300m の山地・丘陵地で、北端では阿武隈川と接する。丘陵縁辺は、阿武隈山地に源を発する小河川によって開析された櫛状の谷地形となり、谷底には谷中平野が形成されている。丘陵の東側には、沖積地を挟んで海岸線に平行した約 7 列の浜堤が認められる。

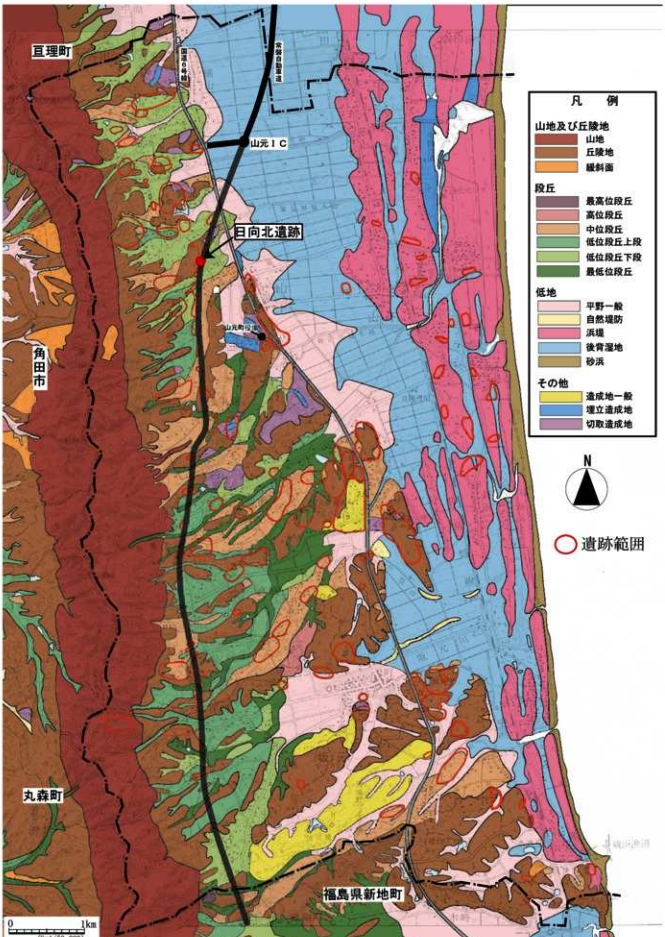
日向北遺跡は、平成 19・20 年度に実施された分布調査の際、「山林のため遺跡の有無が確認できなかった箇所のうち、地形的に遺跡が存在する可能性のある箇所」とされた地点で、立木伐採後の平成 24 年 2 月に実施した確認調査により遺構が発見され、登録された遺跡である。遺跡は、山元町役場の北北西約 1.3km の亘理郡山元町山寺字日向に位置し(第 2・3 図)、阿武隈山地から東に延びる標高 20～30m の丘陵東斜面に立地する（第 2 図)。遺跡の範囲は、東西 50m、南北 75m ほどの広がりをもつ。現況は、山林・原野で、今回の調査区の東側は宅地・畑地として利用されている。



第 1 図　山元町と日向北遺跡の位置

2. 周辺の遺跡

山元町には、現在まで 100 余りの遺跡が登録されている（第 3 図、第 1・2 表)。その分布は、地形的に阿武隈山地裾部、そこから延びる丘陵縁辺部、浜堤列周辺の大きく 3 つに分けられる。阿武隈山地裾部には縄文時代から中世に至る各時代の遺跡がある。丘陵縁辺部には縄文時代から近世までの遺跡が分布するが、その主体は古代と中世である。浜堤列周辺は近年の分布調査のより発見された遺跡がほとん



第２図　日向北遺跡及び山元町内の地形分類図

どで、古代以降の遺跡が分布している。

これまで山元町内の遺跡のうち本格的な発掘調査が実施された遺跡は、中島貝塚や合戦原遺跡、狐塚遺跡などわずか数例で、町内の原始から中世の歴史は未解明な点が多い状況にあった。しかし、平成21年度以降、町内では常磐自動車道山元IC開通に伴う周辺地区の開発や常磐自動車道（県境－山元間）建設工事、平成23年3月11日に発生した東日本大震災に伴う復興事業などに関連した発掘調査が継続的に行われ、これまで知られていなかった山元町の歴史が少しずつ明らかになってきている。

以下これまでに調査された代表的な遺跡について、時代ごとに記述する。

【縄文時代の遺跡】

前期の北経塚遺跡（42）、前期～中期の西石山原遺跡(16)、中期～晩期の中島貝塚(50)、後期の谷原遺跡(4)、晩期の中筋遺跡(1) などがある。

北経塚遺跡では、平成15・21・23年に調査が行われ、前期初頭の竪穴住居跡、土坑、遺物包含層、ピット群などが検出された（関2004、山田・村上・山口2010、山田・藤田・佐伯2013）。

西石山原遺跡では、平成22・23年に調査が行われ、前期の土坑、中期末葉の竪穴住居跡などが検出された（初鹿野ほか2012）。

中島貝塚では、昭和53年に調査が行われ、縄文土器・石器とともに貝殻、魚骨・獣骨が数多く出土した（山元町誌編纂委員会編1986）。

谷原遺跡では、平成20・22・24年の調査により、後期の掘立柱建物跡で構成される環状集落が確認され、この他、土坑や遺物包含層などが検出された。

中筋遺跡では、平成24年の調査で、晩期の遺物包含層が検出された。

【弥生時代の遺跡】

中筋遺跡(1)、北経塚遺跡(42)、館ノ内遺跡(39)、狐塚遺跡(92)などがある。

中筋遺跡では、平成24年に調査が行われ、水田跡や遺物包含層などが検出され、中期中葉の枡形囲式の土器や石包丁、板状石器などが出土した。

北経塚遺跡では、平成21・23年に調査が行われ、中期後半の十三塚式・後期の天王山式の土器のほか、石包丁が出土した（山田・村上・山口2010、山田・藤田・佐伯2013）。

館の内遺跡では、平成13年に調査が行われ、中期後半の十三塚式の土器が出土している（引地2002）。

狐塚遺跡では、平成5年に調査が行われ、溝跡が確認され、中期後半の十三塚式の土器が出土している。（窪田1995）。

【古墳時代の遺跡】

前期の中筋遺跡(1)・石垣遺跡(6)・的場遺跡(7)、前期～中期の北経塚遺跡(42)、中期の合戦原遺跡(61)、後期の狐塚遺跡(92)・日向遺跡(3)・谷原遺跡(4)・井戸沢横穴墓群(88) などがある。

中筋遺跡では、平成24年の調査で、前期の木棺墓が検出された。

石垣・的場遺跡では、平成23年の調査で、前期の竪穴住居跡が検出された。

北経塚遺跡では、平成21・23年の調査で、前期の竪穴住居跡・方形周溝跡、中期の古墳周溝跡が検出された（山田・村上・山口2010、山田・藤田・佐伯2013）。

合戦原遺跡では、平成2年に調査が行われ、南小泉式期の大型の竪穴住居跡が検出された（岩見ほか1991）。

日向・谷原遺跡では、平成22～24年の調査で、後期の竪穴住居跡が検出された。

狐塚遺跡では、平成 4・5 年に調査が行われ、後期の竪穴住居跡・竪穴状遺構・掘立柱建物跡が検出された（千葉 1993、窪田 1995）。

井戸沢横穴墓群では、昭和 44 年に調査が行われ、調査された数基の横穴墓の特徴が福島県浜通り地方に点在する横穴墓群との類似することから、その関連性が指摘されている（佐々・志間・氏家 1971）。

【奈良・平安時代の遺跡】

館ノ内遺跡(39)、合戦原遺跡(61)、狐塚遺跡(92)、谷原遺跡(4)、涌沢遺跡(5)、石垣遺跡(6)、的場遺跡(7)、内手遺跡(10)、上宮前北遺跡(13)、向山遺跡(93)、熊ノ作遺跡（94）などがある。

館の内遺跡では、平成 13 年に調査が行われ、規格的に配置された掘立柱建物跡や竪穴住居跡が検出され、墨書土器や製塩土器などが出土している（引地 2002）。

合戦原遺跡では、平成 2 年に調査が行われ、奈良時代～平安時代の須恵器窯跡が検出された（岩見ほか 1991）。

谷原遺跡では、平成 20・22・24 年の調査で、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・大溝・土坑などが検出され、円面硯や風字硯が出土している。

涌沢遺跡では、平成 24 年の調査で、平安時代の集落跡や土器廃棄土坑、製鉄関連遺構が検出され、墨書土器や八稜鏡などが出土した。

石垣・的場遺跡では、平成 23 年の調査で、平安時代の集落跡、土器廃棄土坑が検出されている。

内手遺跡では、平成 23 年の調査で、平安時代の木炭窯跡・横口付木炭窯跡が検出されている。

上宮前北遺跡では、平成 24 年の調査で、平安時代の製鉄炉が検出されている。

向山遺跡では、平成 25 年の調査で、奈良～平安時代の竪穴住居跡や鍛冶工房が検出されている。

熊ノ作遺跡では、奈良時代～平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出され、「坂本願」と書かれた墨書土器や風字硯、石帯、木簡などが出土している。

【中世の遺跡】

北経塚遺跡(42)、小平館跡(43)、日向遺跡(3)、谷原遺跡(4)、鷲足館跡(49)などがある。

北経塚遺跡では、平成 21・23 年の調査で、13 世紀後半～14 世紀以降の掘立柱建物跡・井戸跡・土坑が確認され、中世の集落の存在が明らかになった（山田・村上・山口 2010、山田・藤田・佐伯 2013）。

日向・谷原遺跡では、平成 22～24 年の調査で、掘立柱建物跡多数・井戸跡・土坑・溝跡などが検出され、中世の大規模な屋敷跡の存在が確認された。

小平館跡は、室町時代の天文年間(1532～1555 年)に亘理要害 14 世亘理宗隆が居館したとされている館跡で（柴桃 1974）、平成 24・25 年に調査が行われ、掘立柱建物跡・溝跡が検出された。

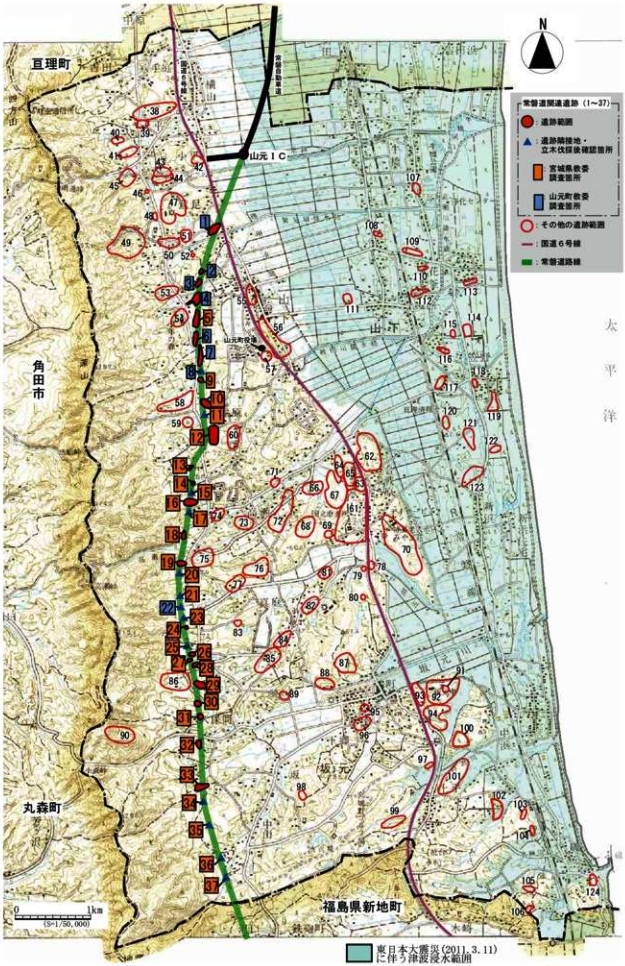
鷲足館跡は、山元町鷲足地区の山間部に位置する中世の山城で、平成 25 年に調査が行われ、腰郭と柱穴列で区画された曲輪が確認され、掘立柱建物跡が多数検出された。

【近世の遺跡】

山王 B 遺跡(9)、蓑首城跡(96)などがある。

山王 B 遺跡では、平成 22 年の調査で、掘立柱建物跡・溝跡・土坑が検出された（初鹿野ほか 2012）。

蓑首城跡は、戦国時代末期に築城され、元和 2（1616）年以降、大條氏が長期間にわたり居城した城で、平成 25 年に二ノ丸跡の調査が行われ、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、溝跡が検出された。



第３図　山元町内の遺跡分布と常磐自動車道建設関連遺跡

第1表　常磐自動車道建設計画に伴う関連遺跡・地点一覧

No.	遺跡名	種別	時代等
1	中筋遺跡	水田・包含地・墓域	縄文後・弥生・古墳・中世 【平成23・24年度調査：町】
2	日向北遺跡	集落	公木伝阪地域認識所一ヶ谷の遺跡として登録 古墳、中・近世。【平成24年度調査：町】
3	日向遺跡	集落	古代・中世 【平成23年度調査：町】
4	谷原遺跡	集落	縄文～中世 【平成23・24年度調査：町】
5	浦尻遺跡	集落・生産	公木伝阪地域認識所一浦尻遺跡として登録 古代～近世。【平成23年度調査：県】
6	石場遺跡	集落	縄文・古墳～近世 【平成23年度調査：町】
7	的場遺跡	集落	縄文・古墳～近世 【平成23・25年度調査：町】
8	—	—	公木伝阪地域認識所。【平成23年度調査：町】 現地確認の結果、調査不要と判断
9	山王B遺跡	集落	近世。【平成22・23年度調査：県】 報告文献：宮城県文化財調査報告書第230集
10	内手遺跡	製鉄・生産	平安 【平成23年度調査：県】
11	内手遺跡 南隣接地	生産	古代の木炭窯跡と墓確認 内手遺跡範囲拡大。【平成23年度調査：県】
12	浅生原遺跡	散布地	縄文中・後、中世。【平成23年度調査：県】 報告文献：宮城県文化財調査報告書第230集
13	上宮前北遺跡	製鉄	公木伝阪地域認識所一上宮前北遺跡として登録 古代。【平成23年度調査：県】
14	上宮前遺跡	散布地	平安・中世。【平成22・23年度調査：県】 報告文献：宮城県文化財調査報告書第230集
15	西石山原遺跡 北隣接地	—	試掘の結果、遺跡との関わりなし 【平成23年度調査：県】
16	西石山原遺跡	集落	縄文前・中、平安。【平成22・23年度調査：県】 報告文献：宮城県文化財調査報告書第230集
17	西石山原遺跡 南隣接地	集落	地蔵下遺跡の近隣地と推測 西石山原遺跡範囲拡大。【平成23年度調査：県】
18	北山神遺跡	散布地	縄文。【平成22・23年度調査：県】 報告文献：宮城県文化財調査報告書第230集
19	南山神B遺跡	散布地	縄文・古代。試掘の結果、用地内に遺構なし 【平成23年度調査：県】 報告文献：宮城県文化財調査報告書第230集
20	南山神B遺跡 隣接地	集落	試掘の結果、縄文時代の遺構確認。 南山神B遺跡範囲拡大。【平成23年度調査：県】
21	—	—	試掘の結果、遺跡との関わりなし。 【平成23年度調査：県・町】
22	—	—	試掘の結果、遺跡との関わりなし。 【平成23年度調査：町】
23	新田B遺跡 隣接地	—	試掘の結果、遺跡との関わりなし。 【平成23年度調査：県】
24	新田B遺跡	散布地	古代。試掘の結果、用地内に遺構なし。 【平成23年度調査：県】
25	影倉E遺跡 隣接地	—	試掘の結果、遺跡との関わりなし。 【平成23年度調査：県】
26	影倉E遺跡	散布地	縄文・古代～中世。おとし穴 【平成23年度調査：県】
27	影倉B遺跡	散布地	縄文 【平成23年度調査：県】
28	影倉D遺跡	散布地	古代 【平成23年度調査：県】
29	影倉D遺跡	製鉄	古代、製鉄 【平成23年度調査：県】
30	荷駄場B遺跡	散布地	古代 【平成23年度調査：県】
31	荷駄場遺跡	散布地	縄文、試掘の結果、用地内に遺構なし。 【平成23年度調査：県】
32	上小山遺跡	散布地	古代～中世 【平成23年度調査：県】
33	法苑遺跡	散布地	縄文。試掘の結果、用地内に遺構なし。 【平成23年度調査：県】
34	—	—	試掘の結果、遺跡との関わりなし。 【平成23年度調査：県】
35	—	—	現地確認の結果、調査不要と判断 【平成23年度調査：県】
36	—	—	試掘の結果、遺跡との関わりなし。 【平成23年度調査：県】
37	—	—	試掘の結果、遺跡との関わりなし。 【平成23年度調査：県】

※太字ゴシック体：本報告遺跡

第2表　その他の山元町内の遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	時代
38	大平館跡	城館	中世
39	舘の内遺跡	遺物包含地	古代
41	味曽野横穴墓群	横穴墓	古墳後
41	味曽野遺跡	散布地	古代
42	北畑窯遺跡	集落・円墳・墓域	縄文前・弥生～中世
43	小平館跡	城館	中世
44	根橋穴墓群	横穴墓	古墳後
45	清水遺跡	散布地	弥生
46	乞ノ入遺跡	散布地	古代
47	山崎横穴墓群	横穴墓	古墳後
48	北遺跡	散布地	古代
49	髭定館跡	城館	中世
50	中島貝塚	貝塚	縄文中～晩
51	中遺跡	散布地	古墳後
52	赤坂遺跡	散布地	縄文・弥生
53	石堂遺跡	散布地	古代
54	山寺館跡	城館	中世
55	作田山館跡	城館	中世
56	山下館跡	城館	中世
57	日向窯跡	窯跡	古代
58	入山遺跡	散布地	縄文後・古代
59	山王遺跡	製鉄	古代
60	下大沢遺跡	散布地	縄文中
61	合戦原遺跡	集落・円墳・窯跡	古墳中・後・奈良・平安
62	合戦原B遺跡	製鉄	古代？
63	合戦原C遺跡	古墳群	古代
64	館下窯跡	窯跡	古代
65	中島館跡	城館	中世
66	大久保遺跡	散布地	縄文・古墳・古代
67	大久保B遺跡	散布地	古代
68	北名生東窯跡	窯跡	古代
69	北名生東C窯跡	窯跡	古代
70	門山遺跡	窯跡	縄文・古代
71	宮後遺跡	散布地	古代
72	室原遺跡	散布地	古代
73	北の原遺跡	散布地	縄文早・前・後
74	石山原遺跡	散布地	縄文
75	南山神遺跡	散布地	縄文早・前
76	真宮館跡	城館	中世
77	北鹿野遺跡	散布地	古墳
78	貝吹城跡	城館	中世
79	沼井崎窯	窯	中・近世
80	北越窯	窯	近世？
82	上台遺跡	散布地	弥生・平安
82	原遺跡	散布地	古墳
83	北種現遺跡	製鉄	平安
84	浅生遺跡	散布地	古代
85	南種現遺跡	散布地	縄文早・前・古墳
86	影倉遺跡	散布地	縄文後・晩
87	愛宕山館跡	城館	室町
88	井戸沢横穴墓群	横穴墓	古墳後
89	日向遺跡	散布地	古墳中・後
90	新城山古館跡	城館	中世
91	狐塚古墳群	円墳	古墳後
92	狐塚遺跡	集落・生産	弥生・古墳・平安
93	向山遺跡	集落・生産	古墳～平安
94	熊の作遺跡	集落	古代
95	館下遺跡	散布地	弥生
96	賀首城跡	城館	近世
97	作田横穴古墳群	横穴墓	古墳後
98	川内遺跡	製鉄	平安？
99	一の沢遺跡	散布地	弥生
100	大塚遺跡	集落・生産	古代
101	駒場原遺跡	散布地	古代
102	新中水窪遺跡	集落・生産	古代
103	東作峠塚	路塚	平安～室町
104	大畑小畑十三塚	塚	室町？
105	森神遺跡	集落・生産	古代
106	山ノ上遺跡	散布地・生産	古代
107	北荒沼遺跡	散布地	古代
108	荒沼遺跡	散布地	古代
109	谷合遺跡	散布地	古代
110	北舘無遺跡	散布地	古代
111	新田遺跡	散布地	古墳後・古代
112	舘無遺跡	散布地	古代
113	浜遺跡	散布地	古代
114	花笠遺跡	散布地	古代
115	西北谷地A遺跡	散布地	古代
116	西北谷地B遺跡	散布地	古代
117	西浦貿遺跡	散布地	古代
118	笠野A遺跡	散布地	古代
119	笠野B遺跡	散布地	古代
120	北中須賀遺跡	散布地	古代
121	狐浦貿遺跡	散布地	古代
122	笠浦遺跡	散布地	古代
123	新浜遺跡	散布地	古代
124	唐船番所跡	番所	近世

第Ⅱ章　調査に至る経緯と経過

1. 常磐自動車道（県境～山元間）建設工事計画と発掘調査に至る経緯

（1）調査に至る経緯

①路線内の埋蔵文化財の取り扱い決定までの経緯

宮城県亘理郡山元町は、常磐自動車道の事業計画地の一つとなっており、平成 11 年度に山元 IC から福島県の新地 IC までのおおよそのルートが決定したことを受け、日本道路公団東北支社仙台工事事務所長から平成 12 年 2 月 5 日付で、道路工事と埋蔵文化財の関わりについての「協議書」が提出された。宮城県教育委員会（以下、県教委）、山元町教育委員会（以下、町教委）では、協議の結果、事業の実施により、遺跡へ与える影響が高いと判断されたことから、平成 12 年 5 月 29 日付け宮城県教育庁文化財保護課長通知により、路線内に含まれる周知の遺跡 4 カ所については、遺構の分布状況を把握するために、「確認調査」を実施する対応に決定した。しかし、具体的な施工時期等が未決定だったため、その後の高速道路建設工事に関する埋蔵文化財の対応は、平成 19 年度までの一定期間、具体的な動きがない状態であった。

平成 19 年度になり、常磐自動車道の施工時期・具体的な路線が決定し、用地のセンター杭設置が完了したことを受け、東日本高速道路株式会社（以下、事業主）・県教委・町教委の三者で改めて協議を行った結果、山元 IC 以南から県境までの総長約 10km の路線について、本格的な分布調査を実施し、路線内の遺跡の分布状況について再度調査することとなった。

分布調査は、県教委・町教委のほか、事業主・町担当部局の担当職員が参加し、平成 20 年 2 月 26 日～28 日（県教委 7 名・町教委 2 名）、平成 21 年 3 月 23 日・24 日（県教委 10 名、町教委 1 名）の 5 日間にわたり実施された。その結果、路線内では、十数カ所で新たに遺跡が発見され、すでに確認されていた周知のものと合わせて 21 遺跡確認された。また、山林のため遺跡の有無が確認できなかった箇所のうち、地形的に遺跡が存在する可能性のある箇所や遺跡隣接地に該当する箇所も 16 箇所確認され、路線内の要確認箇所は、合計 37 地点となった。

これを受け、平成 21 年 5 月に県教委・町教委・事業主の三者で、遺跡の取り扱い・調査体制等について協議した結果、路線内に多数の遺跡・確認箇所があり、かつ遺跡保存のための工法変更が難しいと判断されたことから、路線内 37 カ所の全てについて発掘調査が必要であると判断された。しかしながら、平成 21 年時点での町の調査体制では、提示された調査期間内に発掘調査完了見込みが立たないことから、発掘調査は県教委の全面的な協力を得て、県教委と町教委で分担することとなった。また、用地買収の状況により、平成 21 年度中に路線内の発掘調査可能箇所について調査着手するものとした（しかしながら、平成 21 年 11 月の段階で、平成 21 年度中の発掘調査着手が困難な状況となったため、本格的な発掘調査は、平成 22 年度から開始することとなった）。

②文化財保護法に基づく手続き

上記の三者による協議終了後、新発見遺跡の遺跡登録手続きを実施し、平成 21 年 6 月 2 日には、事業主から路線内の 21 遺跡・その他 16 箇所についての「協議書」が提出され、平成 21 年 6 月 17 日付け「文第 519 号」宮城県教育委員会教育長通知により、周知の遺跡 21 遺跡、その他 16 箇所についての取り扱いが決定した（周知の 21 遺跡：確認調査実施後、遺構が存在する場合は本調査を実施、その他 16 箇所：立木伐採後、現地踏査・確認調査を実施し取り扱いを決定する）。その後、平成 21 年 9 月 1 日には事業主から文化財保護法第 94 条に基づく「発掘通知」が提出され、平成 22 年度から本格的な発掘調

査を実施した。発掘調査完了後には、完了した遺跡ごとにその都度、遺失物法・文化財認定に係る手続きを行った。

（２）施工路線内の発掘調査の経過

常磐自動車道施工路線内の現地発掘調査については、前述のとおり、県教委と町教委が分担し発掘調査を進めた。発掘調査に先立ち、平成 22 年 4 月 1 日に県教委・町教委・事業主の三者で埋蔵文化財発掘調査に係る協定を締結し、その後、町教委については各年度当初に、事業主と山元町で業務委託契約を締結し発掘調査業務にあたった。施工路線内の発掘調査は、原則として高速道路 4 車線分の用地幅に対し、今回の施工分（2 車線分）と側道等の付帯設備のみを対象として行われ、切土部分や工法の関係で 4 車線分の工事を要する範囲については、用地幅すべてを調査の対象とした。また、平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災に伴い、常磐自動車道が「復興道路」に位置づけられたため、平成 24 年度以降の発掘調査実施にあたっては、「復興事業に伴う埋蔵文化財」の適用を受けることとなり、「復興の基準」(平成 23 年 6 月 3 日付け文第 268 号宮城県教育委員会教育長通知、平成 23 年 4 月 28 日付け 23 庁財第 61 号文化庁次長通知) で調査を実施した。

施工路線内の 21 遺跡、その他 16 カ所の合計 37 箇所の現地発掘調査は、平成 22 年度から開始し、平成 25 年度までの 4 カ年にわたり実施した（第 3 図・第 1 表）。山林のため遺跡の有無を確認できなかった 16 箇所については、調査の結果、遺構が発見された日向北(2)・涌沢(5)・上宮前北(13)の 3 箇所は遺跡として新規登録、遺跡隣接地のうち遺構が発見された 3 箇所(11・17・20)は隣接する遺跡への範囲拡大措置がとられた。したがって、最終的な路線内の遺跡数は 24 遺跡という結果となった。

発掘調査は、用地買収等の進捗状況の影響もあり、平成 22 年以前に用地内の確認調査が実施できなかったため、それぞれ遺跡の状況が把握できない状態での開始となった。したがって、発掘調査に際しては、路線内の遺跡範囲について、まず確認調査を実施し、遺構が発見された場合は、事前調査に切り替えて調査を行う方法で行った。

なお、各年度の県教委と町教委の調査遺跡については、第 3 図・第 1 表のとおりである。

2. 日向北遺跡発掘調査の経過

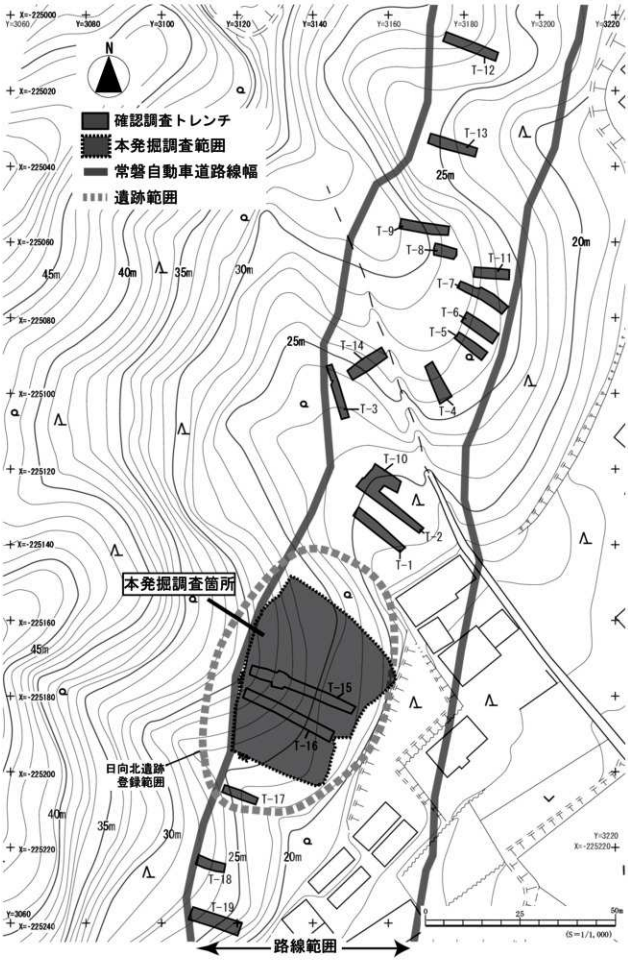
日向北遺跡の確認調査・事前調査は、町教委が主体となり実施した。

（１）確認調査の経過

確認調査は平成 24 年 2 月 16 日～28 日までの 7 日間実施した。調査は、立木伐採後、要確認箇所とされた範囲内の路線計画部分の全域について、トレンチを 19 箇所設定し、遺構の有無を確認する方法で行った。その結果、設定したトレンチのうち、トレンチ 15・16 内に竪穴住居等の遺構が確認されたことから、遺構が確認された丘陵東斜面について、「日向北遺跡」として遺跡登録することとなった（第 4 図）。この結果を受け、事業主と協議した結果、2 車線分の路線範囲について、平成 24 年度から本格的な調査を行った。

（２）事前調査の経過

事前調査は、平成 24 年 5 月 1 日～6 月 26 日の 32 日間実施した。調査面積は約 1,460 ㎡である。調査は、日向北遺跡の近隣に位置する谷原遺跡の事前調査と並行して行ったことから、発掘現場事務所につ


確認調査トレンチ
本発掘調査範囲
常磐自動車道路線幅
遺跡範囲
本発掘調査箇所
日向北遺跡
登録範囲
路線範囲
T-1
T-2
T-3
T-4
T-5
T-6
T-7
T-8
T-9
T-10
T-11
T-12
T-13
T-14
T-15
T-16
T-17
T-18
T-19
N
(S=1/1,000)

第４図　調査区の位置

いては、谷原遺跡付近に設置した現場プレハブを休憩所等として利用し、日向北遺跡の調査現場には、道具倉庫と仮設トイレのみを設置して調査にあたった。

調査区の表土除去は5月1日から開始し、5月8日～23日まで遺構の検出を実施した。遺構の精査は5月24日から着手し、6月14日には遺構の精査がほぼ完了した。6月15日には、調査区全面の写真撮影を俯瞰システムにより行い、その後、一部の遺構について予備調査を実施し、6月22日に現地調査のすべてを完了した。調査完了後は、6月25日から26日には調査区の埋め戻しを実施し、現場の資材等を撤収して、すべての現地作業を終了した。

なお、日向北遺跡の発掘調査体制は、調査員1名、調査補助員1名、作業員10名である。

（3）整理・報告書作成作業の経過

日向北遺跡で出土した遺物、現地の記録類の整理・報告書作成作業は、発掘調査終了後、山元町役場敷地内に設置した整理室内で行った。日向北遺跡の現地調査完了後も、その他の常磐道関連遺跡の現地調査を継続して進めたため、遺物整理は平成24年12月から、図面類の整理・報告書作成は、平成25年度から開始し、平成25年度末に作業を完了した。

【平成24年度の作業内容】
- 出土遺物の整理作業（洗浄・接合・注記・復元）
- 記録写真のネーミング

【平成25年度の作業内容】
- 平面図、断面図の修正
- 出土遺物の実測図・拓本の作成、実測図のトレース、出土遺物の写真撮影
- 断面図のトレース、平面図・写真類の版組み
- 報告書執筆
- 出土遺物、記録類の収納

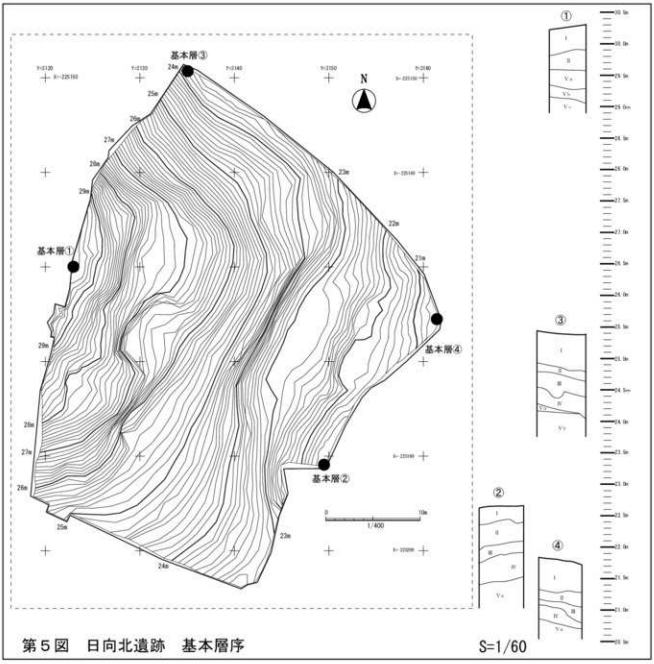
整理作業の様子

第Ⅲ章　発 掘 調 査

1. 基本層序

今回の調査区は、標高 21～30m の緩斜面・斜面に位置する。調査区西部の標高が最も高く、そこから東にかけて傾斜する。調査区の発掘調査実施前の土地利用状況は、山林・原野である。

調査区の基本層序は、調査地点によって若干の相違はあるが、原則として上から現代の表土・耕作土（Ⅰ層）、旧表土（Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層）、地山（Ⅴ層）の順で構成される。遺構確認面はⅣ・Ⅴ層上面である。表土・耕作土（Ⅰ層）と旧表土（Ⅱ層）は調査区全域で確認された。旧表土（Ⅲ・Ⅳ層）は東・北東・南側斜面のみに分布している。旧表土（Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層）、地山（Ⅴ層）の残存状況から、今回の調査区については、調査区西側の丘陵頂部については若干の削平を受けていると想定されるが、基本的に本来の地形が残存しているものと考えられる。それぞれの層の概要は以下のとおりである（第５図）。



第５図　日向北遺跡　基本層序　　S=1/60

Ⅰ層：表土・耕作土（現代）。層厚は 15～80cm。東側斜面に厚く堆積。

Ⅱ層：旧表土。灰褐色（10YR4/2）シルト。層厚は 20～40cm。北東斜面に厚く堆積。地山粒子・炭化物片を含む。

Ⅲ層：旧表土。暗褐色（10YR3/4）シルト。層厚は 8～40cm。東・北東・南側斜面のみに堆積。地山粒子・炭化物片を含む。

Ⅳ層：旧表土。褐色（7.5YR4/4）シルト。層厚は 10～50cm。東・北東・南側斜面のみに堆積。地山粒子・炭化物片を含む。東斜面においては、掘立柱建物跡を構成する柱穴の掘込面であることから、これらの建物構築以前に堆積した層と考えられる。

Ⅴ層：地山。Ⅴa～c 層に細別され、Ⅴa 層：明黄褐色(10YR6/8)砂質シルト、Ⅴb 層：黄褐色(2.5Y7/4)砂質シルト、Ⅴc 層：橙色(7.5YR6/6)砂質シルトである。Ⅴc 層→Ⅴb 層→Ⅴa 層の順に堆積している。遺構確認面はⅤa 層である。Ⅴa 層は調査区全域で確認され、部分的に地山に含まれる鉄分の酸化により赤色化している箇所がみられた。

2．発掘調査の方法

今回の調査は、常磐自動車道（県境～山元間）建設工事に伴う発掘調査であり、本遺跡の現地調査・整理作業は下記の方法により行った。

（1）現地調査

【調査区の設定】

今回の調査範囲は、平成 24 年 2 月 16 日～28 日に実施した確認調査の結果により、遺構が確認された範囲を調査区とし、事前調査を行った（第 4 図）。

【表土除去・遺構精査】

表土除去作業はバックホー(0.45 ㎥)・不整地運搬車(10t)、遺構検出以降の作業は人力により行った。なお、遺構検出作業については、基本層Ⅵ～Ⅴa 層上面で行った。

【遺構測量】

検出した遺構や調査区の図面作成については、遺構平面図・等高線作成はトータルステーション(SRX5X)及び電子平板システム（遺構くん cubic 2011 7.02)、遺構断面図は手実測により縮尺 1／20 で実測した。その際、調査対象範囲に設置した国家座標系に基づく基準杭を利用した。測量基準杭の国家座標は例言に示したとおりである。

【遺構番号】

遺構番号は、現地調査の段階で、遺構の性格に関わらず、1 から通し番号を振り、各種記録類を作成した。その後、整理作業の段階で、遺構番号を各遺構の性格ごとに再度振り直した。なお、遺構の性格ごとの略記号については例言に示したとおりである。

【遺構の記録作成】

今回の調査で検出した遺構のうち、竪穴住居跡、溝跡、土坑については、原則として、すべての記録作成（平面図・断面図・写真撮影）を行った。これら以外の中世以降と判断される柱穴・ピット類は、調査を円滑に進めるため、遺構平面の下場計測や断面図・写真等の記録作成の一部を省略した。具体的には、建物・柱穴列を構成する柱穴については、必要箇所のみ断面図作成・写真撮影等を行い、これ以外の柱穴・ピットは、法量計測・土層注記の記録作成のみを行った。この他、今回の調査で掘り込みを行った遺構の底面標高はすべて記録した。

【遺物の記録・取り上げ】

遺構から出土した遺物のうち、出土状況の平面記録の対象としたものは、遺構に伴う遺物でかつ残存状況のよいもののみとした。

遺物の取り上げについては、原則として遺構出土遺物は出土層位ごと、遺構外出土遺物は検出面等として記録し取り上げた。ただし、遺構出土の遺物のうち、半裁時（分層前）に出土した遺物で出土層位が明確でないものは、「堆積土」として取り上げた。

【写真撮影】

記録写真には、一眼レフデジタルカメラ(NikonD90/レンズ AF-S　NIKKOR 18-200mm/画質モード RAW＋FINE)、俯瞰撮影システムを使用した。調査がほぼ終了した平成 24 年 6 月 15 日には、デジタルカメラ（RICOH・CX4）と俯瞰システム（CUBIC）を使用し、調査区全景の写真撮影を行った。

（２）室内整理

①遺物の整理作業

【遺物洗浄・接合・復元】

遺物の洗浄は、水洗により作業を行い、比較的脆い遺物（土師器）については、土器強化剤（使用薬剤：バインダー17）による処理を施した。遺物の接合は、まず同一遺構内の出土遺物の接合を行い、その後、別々の遺構間、その他（検出面・排土など）から出土した遺物の接合を行った。遺物の復元は、実測図作成が可能なものを対象として作業を行った。

【注記作業】

遺物の注記は、ジェットマーカー（第一合成株式会社）を一定期間リースし、機械による注記を行った。遺物への注記内容は、原則として遺跡名の略号・調査年・出土遺構・出土層位とし、遺物の内面等に注記した。なお、注記した出土遺構名は、現場調査で付した番号とした。

【遺物抽出・実測図・拓本図作成】

遺物の抽出・実測図作成は調査員・調査補助員が行い、拓本作成は整理作業員、報告書用の拓本図作成は調査補助員が担当した。

遺物抽出に際しては、原則として遺構に伴う遺物を中心に抽出し、遺構に伴わないものや遺構外出土のものについても図化が可能なものは抽出の対象とした。

遺物の実測図については､原則として手実測により作成したが､一部の遺物は遺物くんcubic2012 4.00を使用して作成し、また、一部は民間調査機関（株式会社シン技術コンサル）に委託して作成した。

拓本図の作成は、墨拓と画仙紙を使用し拓本を作成した後、スキャナーで PC に画像を取り込み、報告書掲載用に加工した。

【実測図トレース、写真撮影】

遺物の実測図のトレース図は、素図をスキャナーで取り込み､PC 上でのデジタルトレースを行い作成した。報告書に掲載する遺物の写真撮影・写真加工作業は、民間機関（株式会社アートプロフィール）に委託した。

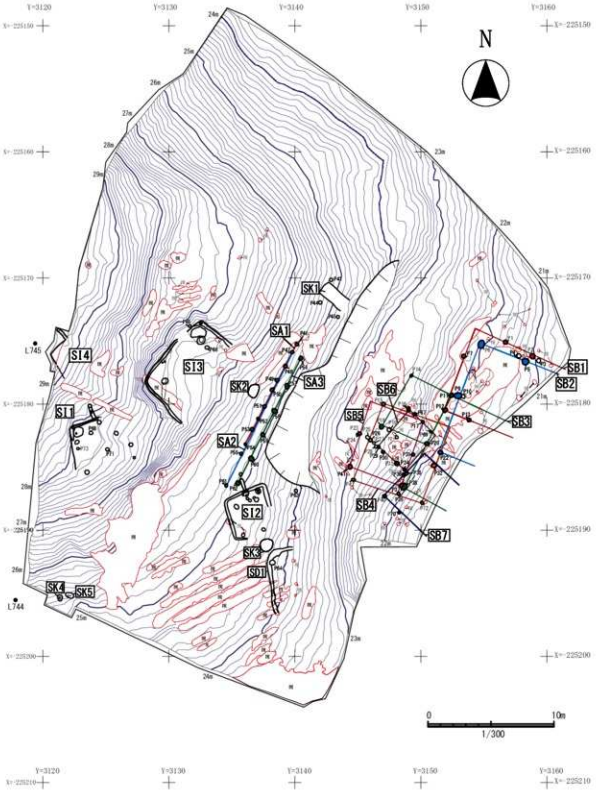
②図面の整理・報告書作成

遺構図の整理作業は、平面図修正、断面図修正・トレース、土層注記等のデータ入力を行ったのち、図版作成、図面収納の手順で行った。報告書の執筆は、調査員・調査補助員が担当した。

なお、遺物・断面図のトレース図作成、写真画像処理、遺構図等の図版作成、報告書版組みについては、遺構くん cubic 2012 8.03、Adobe Illustrator CS5、Adobe Photoshop CS5、Adobe InDesign CS5、表データ・報告書原稿に作成については Microsoft Office Word ・Excel のソフトウェアを使用した。

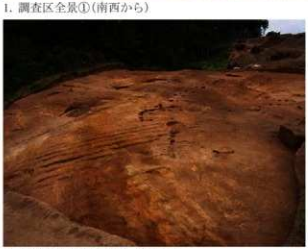
3. 発見された遺構と遺物

今回の調査では、竪穴住居跡４軒、掘立柱建物跡７棟、柱穴列跡３条、溝跡１条、土坑５基、ピット20 個を検出した（第６・７図）。出土遺物は、土師器、須恵器、陶磁器、土製品、鉄製品、石器などである。以下、遺構ごとに記述する。



第６図　日向北遺跡　遺構配置図

1. 調査区全景①(南西から)



2. 調査区全景②南西部（南から）

3. 調査区全景③中央部（南東から）

4. 調査区全景④南東部（北東から）

5. 調査区全景⑤南東部（南から）

第７図　日向北遺跡　調査区全景

(1) 竪穴住居跡

調査区西側斜面で３軒（ＳＩ１・２・４）、調査区中央斜面で１軒（ＳＩ２）、合計４軒検出した。

【ＳＩ１　竪穴住居跡】（第８～10図、第３表）

標高 27.0～28.0m 前後の斜面に立地する。確認面は基本層Ｖa 層である。P68・71・73 と重複し、これらより古い。住居南東・南部は後世の削平を受けており、残存していない。また、本住居跡の一部は、確認調査の際に掘削したトレンチ 16 内に位置し、調査時に住居堆積土及び壁を一部除去してしまっている。

〔規模・平面形〕北－南 3.4m以上、東－西 2.7m以上の隅丸方形を呈する住居跡と思われる。柱穴跡の残存状況から、住居跡の本来の規模は一辺 5m 前後であったと推測される。

〔主軸方向〕住居西辺が真北に対し、西に約 8°傾く（N-8°-W）。

〔壁〕住居北西コーナー部分が最も残りがよく、高さ 15cm 程度残存していた。

〔床面〕地山を床面としている。床面は、住居北東部分のみ残存していた。

〔カマド〕住居北壁中央に付設されており、カマドの煙道・煙出ピットは残存していたが、カマド燃焼部の焼面・側壁は残存していなかった。

〔周溝〕住居壁際を巡る。周溝は全周せず、住居北西コーナーと北辺のみで確認した。上幅 14～28cm、下幅 4～10cm、深さ 11cm 前後である。北辺では壁面を 5～6cm ほど奥に抉り込んでいる。周溝底面は西から東へ向かって傾斜している。

〔床面施設〕柱穴跡を３個（P1・2・4）、ピットを３個（P3・5・6）、土坑を１基（SK1）検出した。

柱穴（P1・2・4）は住居の西側 2 個（P1・2）と東に 1 個（P4）配置されており、径 32～37cm の円形を呈し、深さ 12～35cm で、径 10～22cm の円形の柱痕跡が認められた。位置的にみて、住居の主柱穴であると思われる。

ピット（P3・5・6）は、直径 22～33cm の円形を呈し、深さ 10～18cm である。P6は、堆積土に炭化物片・焼土粒子を含み、カマド付設部付近に位置することから、カマドに関連する遺構である可能性が考えられる。P3・5 については、その性格は不明であるが、位置的に柱穴跡である可能性が想定される。

土坑（SK1）は、住居北西コーナー部で確認し、直径 83×73cm、深さ 7cm の円形を呈する。堆積土は１層で、炭化物片・焼土粒子が微量含まれる自然堆積層である。カマド付設部の西脇に位置することから、貯蔵穴である可能性が考えられる。

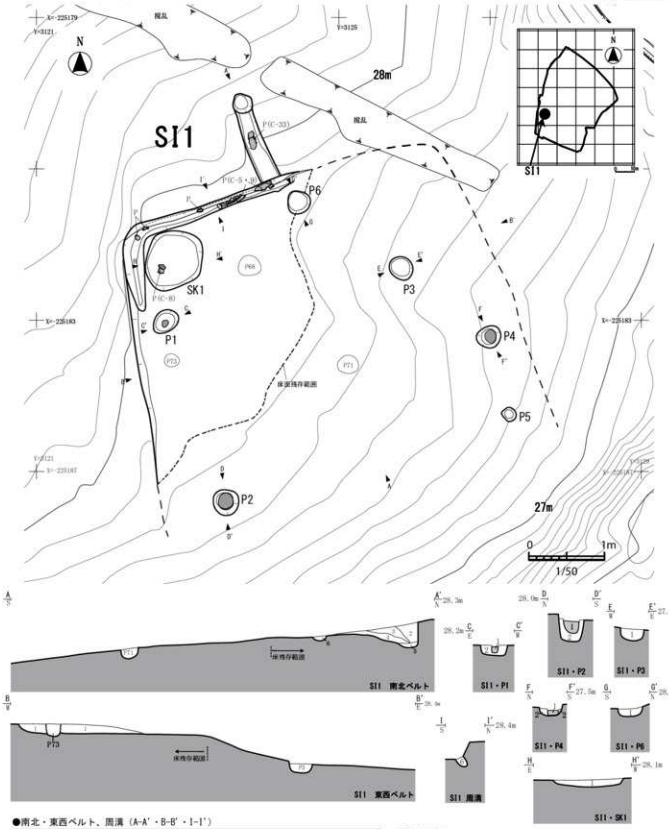
〔堆積土〕住居の堆積土は６層に分かれ、1 層は住居堆積土、2～5 層はカマド煙道・煙出ピット堆積土、6 層は周溝堆積土である。1～5 層は自然堆積で、6 層は人為堆積である。住居堆積土は南東部及び南部が残存していなかった。

〔出土遺物〕住居検出面、堆積土、カマド煙出 Pit・煙道・燃焼部、周溝、SK1・1 層から土師器片（非ロクロ成形）が出土し、このうち、図示できたものは土師器坏（第９図１）・甕（第９図２～5）である。

なお、周溝から出土した甕（第９図４・5）は、甕の破片が周溝内に並べられた状態で出土した（第 10 図５・６写真参照）。

第3表　SI1　竪穴住居跡　床面施設一覧

遺構番号	種類	規模・ピット・土坑平面形（上段：上段・下段・一）				備考
		平面形	長軸	短軸	残存深	
SI1・P1	柱穴	円形	37	27	13	柱痕跡：円形・径10cm
SI1・P2	柱穴	円形	35	34	35	柱痕跡：円形・径22cm
SI1・P3	小穴	円形	25	24	14	
SI1・P4	柱穴	円形	32	29	12	柱痕跡：円形・径17cm
SI1・P5	小穴	円形	22	21	10	
SI1・P6	小穴	円形	33	31	18	
SI1・SK1	土坑	円形	83	73	7	



●南北・東西ベルト、周溝（A-A'・B-B'・I-I'）

層	土色	土性	備考
1	褐色(7.5YR4/4)	シルト	炭化物片微量含む。
2	褐色(7.5YR4/4)	シルト	炭化物片少量含む。
3	褐色(7.5YR4/6)	シルト	地山ブロック含む。カマド天井崩落土。
4	褐色(7.5YR4/4)	シルト	炭化物片・焼土粒子少量含む。カマド機能時の堆積土。
5	褐色(7.5YR4/3)	シルト	炭化物片多く含む。カマド機能時の堆積土。
6	褐色(7.5YR4/4)	シルト	地山ブロック多く含む。周溝埋積土(人為埋積)。

●P1・2・4（C-C'・D-D'・F-F'）

層	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	柱痕跡。
2	褐色(10YR4/6)	シルト	掘方埋土。

●P3（E-E'）

層	土色	土性	備考
1	褐色(10YR4/6)	シルト	地山粒子多く含む。

●P6（G-G'）

層	土色	土性	備考
1	明褐色(10YR6/6)	シルト	炭化物片少量含む。

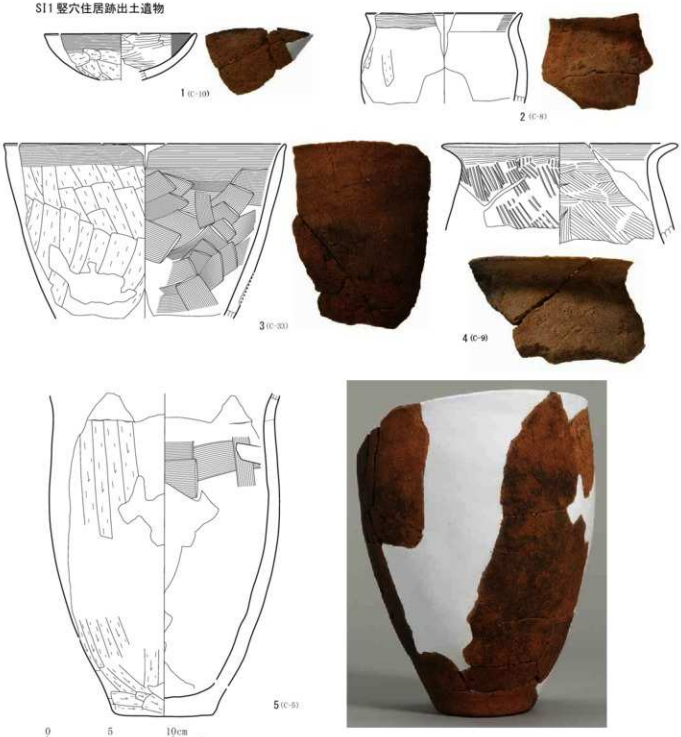
●SK1（H-H'）

層	土色	土性	備考
1	褐色(7.5YR4/4)	シルト	炭化物片・焼土粒子微量含む。

0　1m
1/50

第８図　ＳＩ１　竪穴住居跡（１）

SI1 竪穴住居跡出土遺物



No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SI1 埋積土	土師器	坏	口縁部 ～胴部	外面：口縁部ヨコナデ→胴部ヘラ削り、内面：ヘラミガキ・黒色処理、色調：外面・橙色(7.5YR6/6)、内面・暗灰色(N3/0)、法量：口径(12.0)cm・残存高3.8cm・器厚0.5～0.7cm、丸底	C-10
2	SI1・SK1 1層	土師器	甕	口縁部 ～胴部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラ削り・磨滅、内面：口縁部ヨコナデ・胴部磨滅、色調：内外面・明褐色(7.5YR5/6)、法量：口径(12.4)cm・胴部径(13.2)cm・残存高7.2cm・器厚0.4～0.6cm	C-8
3	SI1 ｶﾏﾄﾞ煙道	土師器	甕	口縁部 ～胴部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラ削り、内面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラナデ、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、法量：口径(20.2)cm・残存高13.9cm・器厚0.3～0.8cm	C-33
4	SI1 周溝	土師器	甕	口縁部 ～胴部	外面：口縁部ヨコナデ→頸部～胴部ハケメ・磨滅、内面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラナデ→ナデ、色調：外面・にぶい橙色(7.5YR6/4)、内面・にぶい橙色(7.5YR6/4)、黒褐色(10YR3/1)、法量：口径(18.8)cm・残存高8.1cm・器厚0.5～1.1cm	C-9
5	SI1 周溝	土師器	甕	口縁部 ～胴部	外面：胴部ヘラ削り、内面：胴部ヘラナデ、色調：外面・明赤褐色(5YR5/6)、内面・橙色(5YR6/6)、法量：胴部径(18.3)cm・残存高25.6cm・底径7.7cm・器厚0.6～2.0cm	C-5

第９図　ＳＩ１　竪穴住居跡（２）

1. ＳＩ１竪穴住居跡　完掘状況（南から）

2. ＳＩ１・Ｐ１　断面（南から）

3. ＳＩ１・Ｐ４　断面（西から）

4. ＳＩ１・ＳＫ１　断面（南から）

5. ＳＩ１カマド・周溝遺物出土状況（西から）

6. ＳＩ１周溝遺物出土状況（南から）

第10図　ＳＩ１　竪穴住居跡（３）

【ＳＩ２　竪穴住居跡】（第 11～14 図、第 4 表）

標高 24.5～25.1m 前後の斜面に立地する。確認面は基本層Ⅴa 層である。住居南東部は残存していない。

〔規模・平面形〕 北－南 3.7m以上、東－西 3.7mの隅丸方形を呈する住居跡と思われる。

〔主軸方向〕 住居西辺が真北に対し、西に約 15°傾く（N-15°-W）。

〔壁〕 住居北西コーナー部分が最も残りがよく、高さ 15cm 程度残存していた。

〔床面〕 地山を床面としている。床面は、住居北西部分のみ残存していた。

〔カマド〕 住居北壁中央に付設されており、カマドの煙道・煙出ピット・カマド燃焼部の焼面・側壁が残存していた。

〔周溝〕 住居壁際を巡る。周溝は残存している範囲では全周している。上幅 5～33cm、下幅 5～24cm、深さ 14cm 前後である。北辺・西辺では壁面を 10cm ほど奥に抉り込んでいる。周溝底面は北西隅から南東に向かって傾斜している。

〔床面施設〕 柱穴跡を 4 個（P1・2・3・4）、ピットを 2 個（P5・6）、土坑を 1 基（SK1）検出した。

柱穴（P1・2・3・4）は住居の四隅に配置されており、径 26～48cm の円形・楕円形・不整形を呈し、深さは 26～48cm であった。柱は全て抜き取られていた。位置的にみて、住居の主柱穴と思われる。

ピット（P5・6）は、直径 20～22cm の円形を呈し、深さ 6～10cm である。P6 は、堆積土に炭化物片を含み、カマド付設部付近に位置することから、カマドに関連する遺構である可能性が考えられる。

土坑（SK1）は、住居北東コーナー部で確認し、直径 54×45cm、深さ 8cm の楕円形を呈する。堆積土は 2 層に分かれ、炭化物片・焼土粒子が含まれる人為堆積層である。カマド付設部の東脇に位置することから、貯蔵穴である可能性が考えられる。

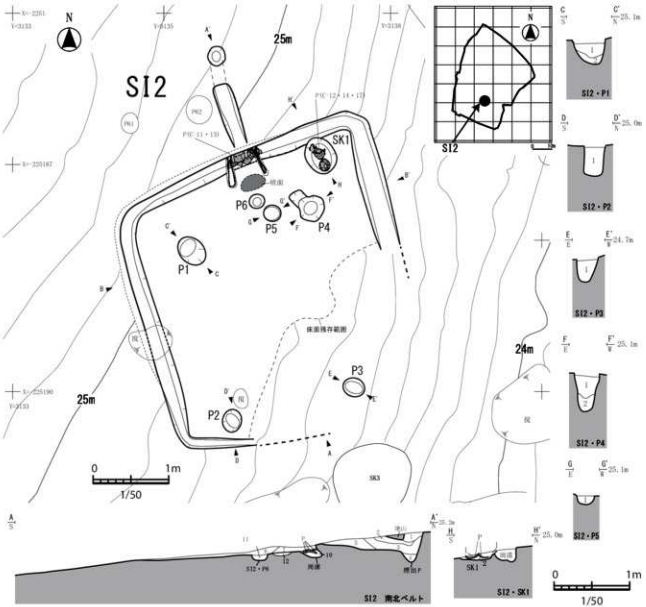
〔堆積土〕 住居の堆積土は 10 層に分かれ、1～5 層はカマド煙道・煙出ピット堆積土、6・8 層は住居堆積土、7 層はカマド燃焼部堆積土、9～10 層は周溝堆積土である。1～8・11～12 層は自然堆積で、9～10 層は人為堆積である。住居堆積土は南東部が残存していなかった。

〔出土遺物〕 住居検出面、堆積土、カマド燃焼部、周溝、SK1・1 層から土師器片（非ロクロ成形）が出土し、このうち、図示できたものは土師器坏（第 12 図 1）・鉢（第 12 図 2～3）・甕（第 12 図 4～8）・甑（第 12 図 9）、土製支脚（第 12 図 10）である。

なお、周溝から出土した甕（第 12 図 4・7）は、甕の破片が周溝内に並べられた状態で出土した（第 14 図 1 写真参照）。

第4表　SI2　竪穴住居跡　床面施設一覧

遺構番号	種類	柱穴・ピット概要（径cm・深cm・カクcm・ハ）				備考
		平面形	長軸	短軸	残存深	
SI2・P1	柱穴	楕円形	41	33	26	柱抜取
SI2・P2	柱穴	円形	26	25	38	柱抜取
SI2・P3	柱穴	円形	30	25	28	柱抜取
SI2・P4	柱穴	不整形	48	33	48	柱抜取
SI2・P5	小穴	円形	22	22	10	
SI2・P6	小穴	円形	20	20	6	
SI2・SK1	土坑	楕円形	54	45	8	人為堆積



●P1・4（C-C'・F-F'）

層	土色	土性	備考
1	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロック多量。焼土粒子・炭化物片微量含む。柱抜取穴埋積土。
2	黄褐色(10YR5/6)	シルト	地山粒子多量。炭化物片微量含む。柱抜取穴埋積土。

●P2（D-D'）

層	土色	土性	備考
1	褐色(10YR4/6)	シルト	地山粒子多量含む。

●P3（E-E'）

層	土色	土性	備考
1	褐色(10YR4/4)	シルト	地山粒子多量含む。

●P5（G-G'）

層	土色	土性	備考
1	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロック少量。炭化物片微量含む。

●SK1（H-H'）

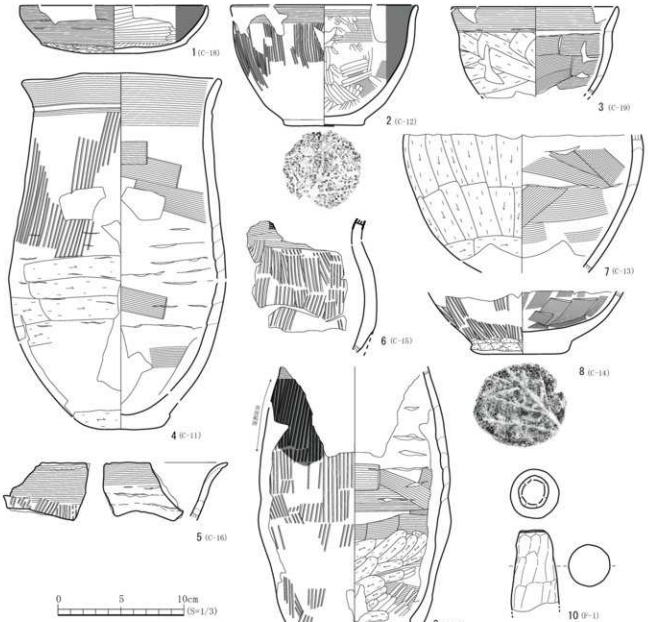
層	土色	土性	備考
1	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロック・焼土粒子・炭化物片含む。SK1埋積土（人為埋積）。
2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロック含む。SK1埋積土（人為埋積）。

●南北・東西ベルト。周溝（A-A'・B-B'）

層	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロック・炭化物片少量含む。
2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山粒子多量。炭化物片少量含む。
3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒子少量。炭化物片多量含む。
4	褐色(10YR4/6)	シルト	地山粒子多量。地山ブロック少量含む。
5	褐色(10YR4/4)	シルト	地山粒子多量。地山ブロック含む。炭化物片少量含む。
6	褐色(10YR4/4)	シルト	地山粒子・炭化物片少量含む。
7	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	焼土粒子・炭化物片多量含む。
8	褐色(10YR4/6)	シルト	地山粒子・ブロック。炭化物片含む。
9	褐色(7.5YR4/6)	シルト	地山ブロック・炭化物片・焼土粒子含む。周溝埋積土（人為埋積）。
10	褐色(7.5YR4/4)	シルト	地山粒子含む。周溝埋積土（人為埋積）。
11	褐色(10YR4/4)	シルト	炭化物片含む。P6埋積土。
12	明赤褐色(2.5YR5/6)	シルト	カマド焼面。

第11図　ＳＩ２　竪穴住居跡（１）

SI2 竪穴住居跡出土遺物



No.	層	種別	器種	残存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→胎土→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SI2・ｴﾘｱ 焼成部	土師器	坏	頸部 ～底部	外面：口縁部ヨコナデ・底部ヘラ削り、内面：ヘラミガキ・黒色処理、色調：外面・にぶい黄橙色(7.5YR7/4)、内面・黒色(N2/0)　、胎土：口径14.8cm・器高3.8cm・器厚0.2～0.3cm	C-18
2	SI2・SK1 1層	土師器	鉢	口縁部 ～底部	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ・磨滅、底部木葉痕、内面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラナデ→ヘラミガキ・黒色処理、色調：外面・橙色(7.5YR7/6)、内面・黒色(N2/0)、胎土：口径14.2cm・器高9.1cm・底径：6.2cm・器厚0.4～1.2cm	C-12
3	SI2 堆積土	土師器	鉢	口縁部 ～胴部	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラ削り、内面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラナデ、色調：外面・橙色(5YR6/6)、内面・橙色(7.5YR6/6)、胎土：口径(6.6)cm・残存高7.2cm・器厚0.3～0.8cm	C-19
4	SI2 周溝	土師器	甕	口縁部 ～底部	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ・ヘラ削り、内面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラナデ、色調：外面・橙色(5YR6/6)、内面・橙色(7.5YR7/6)、黒褐色、胎土：口径15.8cm・器高28.3cm・底径：6.1cm・器厚0.5～1.0cm	C-11
5	SI2 検出面	土師器	甕	口縁部	外面：口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ、内面：口縁部ヨコナデ、色調：内外面・橙色(5YR6/6)、胎土：残存高4.8cm・器厚0.6cm	C-16
6	SI2 堆積土	土師器	甕	頸部 ～胴部	外面：頸部ヨコナデ・胴部ハケメ、内面：頸部ヨコナデ・胴部ヘラナデ、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、内面・褐色(7.5YR4/3)、胎土：器厚0.8～1.0cm	C-15
7	SI2 周溝	土師器	甕	胴部	外面：胴部ヘラ削り、内面：胴部ヘラナデ、色調：外面・明褐色(5YR7/6)、内面・にぶい橙色(7.5YR6/4)、胎土：胴部径19.2cm・残存高10.9cm・器厚0.6～0.9cm	C-13
8	SI2・SK1 1層	土師器	甕	胴部下半 ～底部	外面：胴部ハケメ・ヘラ削り、底部木葉痕、内面：ヘラナデ、色調：外面・赤褐色(10R4/4)/にぶい褐色(7.5YR5/4)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、胎土：底径7.0cm・残存高5.0cm・器厚0.5～1.8cm	C-14
9	SI2・SK1 1層	土師器	甕	胴部 ～底部	外面：頸部ヨコナデ、胴部ハケメ、黒褐、内面：胴部ヘラナデ→ヘラ削り・ヘラミガキ、色調：内外面・橙色(5YR6/8)、胎土：胴部径15.3cm・残存高28.5cm・底径9.8cm・器厚0.5～1.1cm	C-17
10	SI2 堆積土	土製品	支脚	－	外面：ナデ・オサエ、色調：外面・明褐色(7.5YR5/6)/明赤褐色(5YR5/6)、胎土：幅2.4～3.8cm・残存高6.3cm、一部欠損	F-1

第12図　ＳＩ２　竪穴住居跡（２）

1. ＳＩ２竪穴住居跡　完掘状況（南から）

2. ＳＩ２・Ｐ１　断面（東から）

3. ＳＩ２・Ｐ４　断面（南から）

4. ＳＩ２・カマド検出状況（南から）

5. ＳＩ２・Ｐ５　断面（南から）

6. ＳＩ２・Ｐ６　断面（東から）

7. ＳＩ２周溝　断面（南から）

第13図　ＳＩ２　竪穴住居跡（３）

1. ＳＩ２・周溝　遺物出土状況（南から）

2. ＳＩ２・ＳＫ１　遺物出土状況（東から）

SI2 竪穴住居跡出土遺物

第14図　ＳＩ２　竪穴住居跡（４）

【ＳＩ３　竪穴住居跡】（第 15～17 図、第 5 表）

標高 26.0～27.0m 前後の斜面に立地する。確認面は基本層Ⅴa 層である。住居南東部は後世の削平を受けており、残存していない。また、本住居跡の一部は、確認調査の際に掘削したトレンチ 15 内に位置し、調査時に住居堆積土及び壁を一部除去してしまっている。

〔規模・平面形〕 北東－南西 7.1m、北西－南東 4.7m以上の隅丸方形を呈する住居跡と思われる。

〔主軸方向〕 住居北東辺が真北に対し、西に約 52°傾く（N-52°-W）。

〔壁〕 住居北西コーナー部分が最も残りがよく、高さ 30～40cm 程度残存していた。

〔床面〕 住居北西コーナー部分は掘方埋土、その他は地山を床面としている。床面は、住居北東・北西コーナー部分のみ残存していた。

〔カマド・炉〕 認められなかった。

〔周溝〕 住居壁際を巡る。周溝は住居北西・南西部分、北東部分で確認され、北東コーナー部分については、SK1 付近で途切れる。上幅 16～28cm、下幅 11～18cm、深さ 10cm 前後である。北西・北・北東辺では壁面を 4～10cm ほど奥に抉り込んでいる。周溝底面は北西から南西に向かって傾斜している。

〔床面施設〕 柱穴跡を 2 個（P1・2）、土坑を 1 基（SK1）検出した。

柱穴（P1・2）は住居の北西に 1 個（P1）と北東に 1 個（P2）配置されており、径 54～69cm の円形・楕円形を呈し、深さ 30～46cm で、いずれも柱が抜き取られていた。位置的にみて、住居の主柱穴であると思われる。

土坑（SK1）は、住居北東コーナー部で確認し、直径 115×67cm、深さ 14cm の不整形を呈する。堆積土は 2 層に分かれ、いずれも人為堆積である。

〔堆積土〕 住居の堆積土は 6 層に分かれ、1・2 層は住居堆積土、3・4 層は周溝堆積土、5・6 層は住居掘方埋土である。1・2 層は自然堆積で、3～6 層は人為堆積である。住居堆積土は住居北東部及び北西部のみ残存していた。

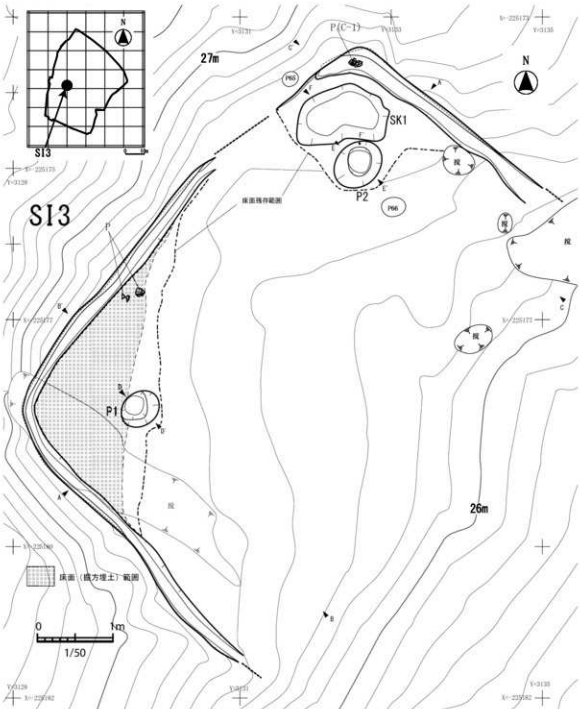
〔出土遺物〕 住居検出面、堆積土、床面、周溝、SK1 から土師器片（非ロクロ成形）・須恵器片が出土し、このうち、図示できたものは土師器坏（第 16 図 1～4）・甕（第 16 図 5）である。

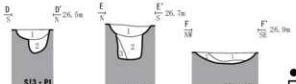
〔その他〕 本住居跡は、確認調査時に設定したトレンチにより、住居北東コーナー付近の壁の一部を削平してしまっているが、その北東コーナーに位置する SK1 の堆積土には炭化物片・焼土粒子が含まれており、土坑の周囲で火を使用していた可能性が想定される。本住居跡付近で検出されたカマドを有する竪穴住居跡（SI1・2）では、カマド脇に貯蔵穴状の土坑が確認されており、その堆積状況は SK1 と類似する。また、本住居壁際で確認された周溝のうち、SK1 付近の周溝は北東コーナー付近で途切れており、一般的な住居跡でみられるカマド付設部分付近の周溝が途切れている状況と類似している。

以上の点を考慮すると、確認調査時のトレンチにより削平してしまった住居北東コーナー付近の壁にはカマドが付設されており、その脇に位置する SK1 はカマドに関連する貯蔵穴等の遺構であった可能性が推測される。

第5表　SI3　竪穴住居跡　床面施設一覧

遺構番号	種類	規模・ピット深度（cm）（cm・cm・cm・cm）平面形	長軸	短軸	残存深	備考
SI3・P1	柱穴	円形	54	45	30	柱抜取
SI3・P2	柱穴	楕円形	69	57	46	柱抜取
SI3・SK1	土坑	不整形	115	67	14	人為堆積





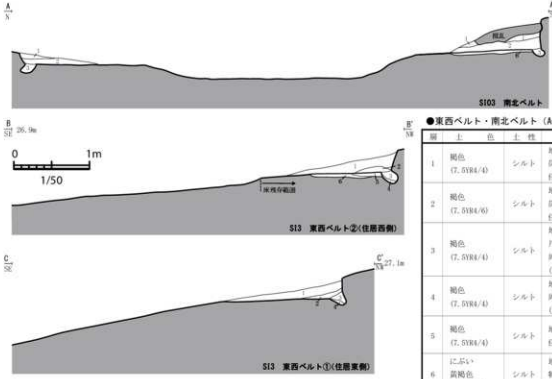
●P1・2（D-D'・E-E'）

層	上　色	上　性	備　考
1	明褐色(7.5YR5/8)	シルト	地山粒子含む。柱抜取穴堆積土。
2	褐色(7.5YR4/6)	シルト	地山粒子少量含む。柱抜取穴堆積土。
3	褐色(7.5YR4/6)	シルト	地山ブロック含む。柱穴掘方埋土。

●SK1（D-D'）

層	上　色	上　性	備　考
1	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山ブロック・炭化物片・焼土粒子少量含む。人為堆積。
2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山ブロック含む。人為堆積。

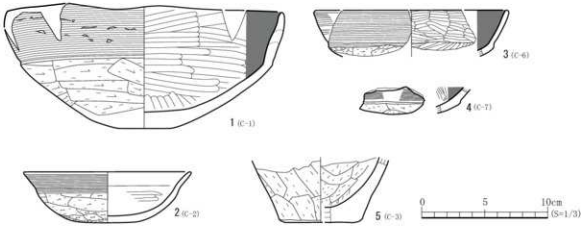
第15図　ＳＩ３　竪穴住居跡（１）



●東西ベルト・南北ベルト（A-A' ～ C-C'）

層	土色	土性	備考
1	褐色 (7.5YR4/4)	シルト	地山ブロック・炭化物片少量含む。住居堆積土。
2	褐色 (7.5YR4/6)	シルト	地山ブロック・炭化物片少量含む。住居堆積土。
3	褐色 (7.5YR4/4)	シルト	地山粒子・炭化物片少量含む。両溝堆積土（人為堆積）。
4	褐色 (7.5YR4/4)	シルト	地山ブロック含む。両溝堆積土（人為堆積）。
5	褐色 (7.5YR4/4)	シルト	地山ブロック含む。住居掘方埋土。
6	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	地山ブロック・炭化物片・焼土粒子含む。住居掘方埋土。

S13 竪穴住居跡出土遺物



No.	層	種別	器種	残存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	S13 周溝上面	土師器	坏	口縁部～底部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部～底部ヘラ削り。内面：ヘラミガキ・黒色処理・潤滑。色調：外面・にぶい黄色(7.5YR6/4)。内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)。法量：口径22.4cm・器高9.9cm・器厚0.5～1.4cm。有段	C-1
2	S13・SK1 1層	土師器	坏	口縁部～底部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部～底部ヘラ削り。内面：ヘラミガキ・黒色処理・潤滑。色調：内外面・橙色(7.5YR7/6)。法量：口径(13.2)cm・器高4.1cm・器厚0.3～0.6cm	C-2
3	S13 堆積上	土師器	坏	口縁部～胴部	外面：口縁部～胴部上半ヨコナデ・胴部下半ヘラ削り。内面：ヘラミガキ・黒色処理。色調：外面・にぶい黄橙色(10YR6/3)。内面・黒褐色(10YR3/1)。法量：口径(15.2)cm・残存高3.7cm・器厚0.3～0.5cm。有段	C-6
4	S13 堆積上	土師器	坏	胴部～底部	外面：胴部上半ヨコナデ・胴部下半～底部ヘラ削り。内面：ヘラミガキ・黒色処理。色調：外面・黒褐色(10YR3/1)。内面・暗灰色(N3/0)。法量：残存高2.1cm・器厚0.5cm。有段	C-7
5	S13・SK1 1層	土師器	甕	底部	外面：胴部下半ヘラ削り。内面：ヘラ削り。色調：外面・にぶい赤褐色(5YR4/3)。内面・灰褐色(7.5YR4/2)。法量：底径(5.6)cm・残存高5.2cm・器厚0.7～1.9cm	C-3

第16図　Ｓ１３　竪穴住居跡（２）

1. ＳＩ３竪穴住居跡　完掘状況（南東から）

2. ＳＩ３・Ｐ１　断面（西から）

3. ＳＩ３遺物出土状況（南東から）

4. ＳＩ３・周溝遺物（C-1）
出土状況（南西から）

S13 竪穴住居跡出土遺物

1 (C-1)

2 (C-2)

5 (C-3)

3 (C-6)

4 (C-7)

0　5　10cm
(S=1/3)

第17図　ＳＩ３　竪穴住居跡（３）

【ＳＩ４　竪穴住居跡】（第 18～19 図）

標高 29.0m 前後の斜面に立地する。確認面は基本層Ｖa 層である。住居北西部以外は後世の削平を受けており、残存していない。

〔規模・平面形〕北東－南西 1.9m以上、北西－南東 0.7m以上の隅丸方形を呈する住居跡と思われる。

〔主軸方向〕住居西辺が真北に対し、西に約 30°傾く（N-30°-W）。

〔壁〕住居北西コーナー及び北壁のみが残存しており、高さ 20cm 程度である。

〔床面〕床面は住居北西コーナー部分のみが残存しており、地山を床面としている。

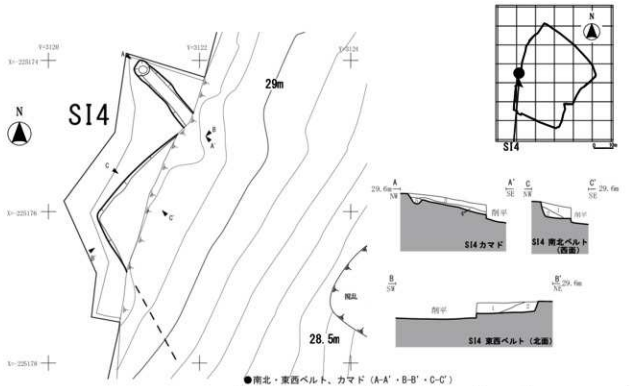
〔カマド〕住居北壁中央に付設されており、カマドの煙道・煙出ピットは残存していたが、カマド燃焼部の焼面・側壁は残存していなかった。

〔周溝〕認められなかった。

〔床面施設〕認められなかった。

〔堆積土〕住居の堆積土は 5 層に分かれ、1・2 層は住居堆積土、3～5 層はカマド煙道・煙出 Pit 堆積土で、いずれも自然堆積である。住居堆積土は住居北西部のみ残存していた。

〔出土遺物〕住居堆積土・床面直上から土師器片（非ロクロ成形）・須恵器片が出土し、このうち、図示できたものは土師器坏（第 19 図 1～5）、須恵器盤（第 19 図 6）である。

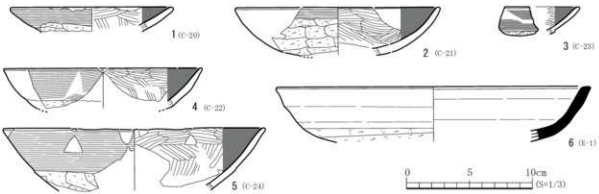


●南北・東西ベルト、カマド（A-A'・B-B'・C-C'）

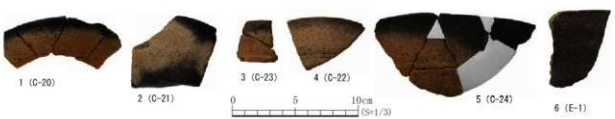
層	土色	土性	備考
1	褐色(7.5YR4/3)	シルト	地山粒子含む含む。住居堆積土。
2	褐色(7.5YR4/4)	シルト	地山粒子含む。炭化物片微量含む。住居堆積土。
3	褐色(7.5YR4/3)	シルト	地山ブロック少量含む。カマド天井崩落土含む。
4	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	地山粒子・炭化物片微量含む。カマド機能時の煙道堆積土。
5	黒褐色(10YR3/1)	シルト	炭化物片含む。カマド煙出Pit堆積土。

第18図　ＳＩ４　竪穴住居跡（１）

SI4 竪穴住居跡出土遺物



No.	層	種別	器種	残存	特徴【技法（外面・内面）→色調（内面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SI4 堆積土	土師器	坏	口縁部 ～胴部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラ削り、内面：ヘラミガキ・黒色処理、色調：外面・橙色(7.5YR6/6)、内面・黒褐色(10YR3/1)、法量：口径(12.8)cm・残存高1.8cm・器厚0.6cm	C-20
2	SI4 堆積土	土師器	坏	口縁部 ～胴部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部上半以下ヘラ削り、内面：ヘラミガキ・黒色処理、色調：外面・にぶい黄橙色(10YR7/3)、内面・黒色(N2/0)、法量：口径(16.0)cm・残存高3.8cm・器厚0.4～0.6cm	C-21
3	SI4 床直上	土師器	坏	口縁部 ～胴部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラ削り、内面：ヘラミガキ・黒色処理、色調：外面・黒褐色(10YR3/1)、内面・にぶい橙色(7.5YR6/4)、法量：残存高2.2cm・器厚0.3～0.4cm、有段	C-23
4	SI4 堆積土	土師器	坏	口縁部 ～胴部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラ削り、内面：ヘラミガキ・黒色処理、色調：外面・にぶい黄橙色(10YR6/4)、内面・黒色(N2/0)、法量：口径(15.6)cm・残存高3.2cm・器厚0.4～0.5cm	C-22
5	SI4 床直上	土師器	坏	口縁部 ～胴部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラ削り、内面：ヘラミガキ・黒色処理、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、内面・黒色(N2/0)、法量：口径(20.8)cm・残存高5.0cm・器厚0.5cm	C-24
6	SI4 堆積土	須恵器	盤	口縁部 ～胴部	外面：ロクロナデ・胴部下半回転ヘラ削り・自然釉、内面：ロクロナデ、色調：外面・黄灰色(2.5Y4/1)、内面・にぶい黄色(2.5Y6/3)、法量：口径(24.8)cm・残存高4.4cm・器厚0.6～0.8cm	E-1



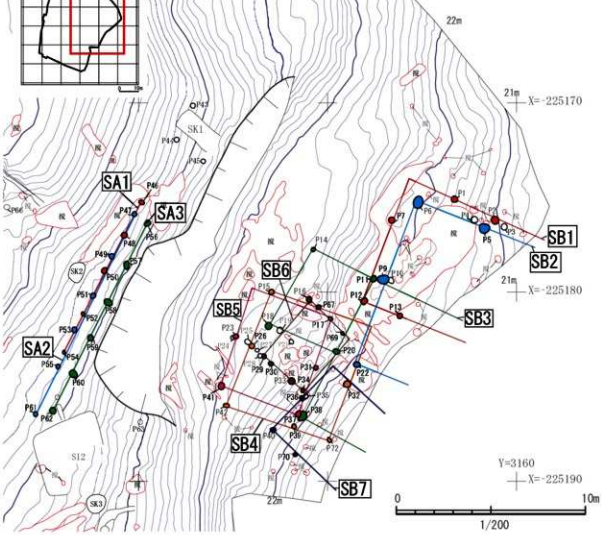
ＳＩ４竪穴住居跡　完掘状況（南東から）

第19図　ＳＩ４　竪穴住居跡（２）

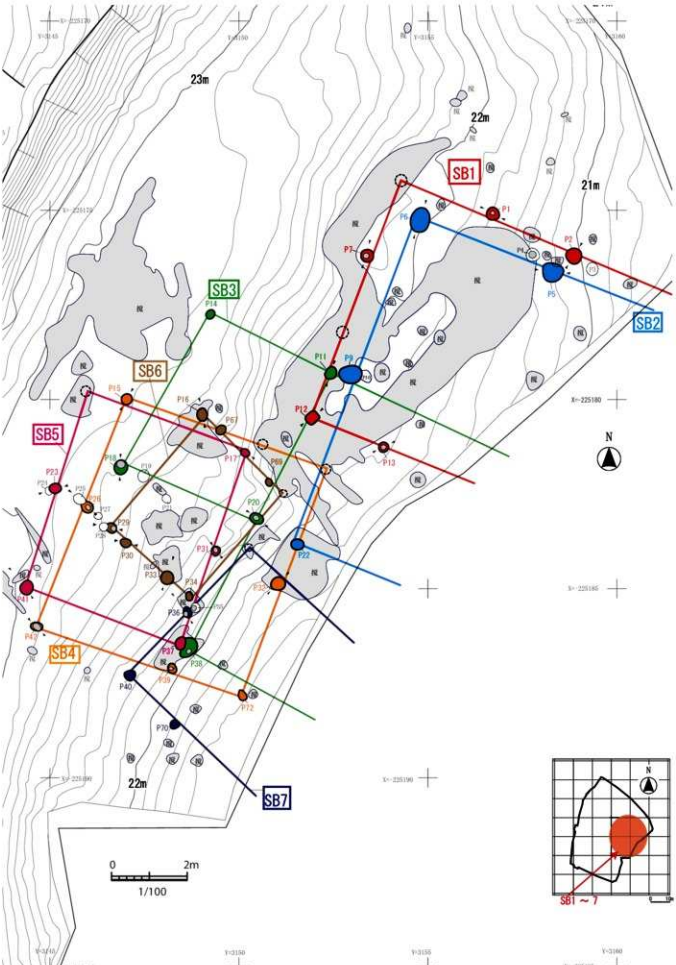
（２）掘立柱建物跡・柱穴列

ＳＢ1～7 掘立柱建物跡７棟・ＳＡ1～3 柱穴列跡３条を検出した。確認面はⅣ～Ⅴa 層である。建物跡は調査区東側の標高 21～23m の緩斜面に立地し、柱穴列跡は標高 25m 付近の斜面に立地している。以下、その詳細について説明する。

なお、今回の調査で認定できた建物跡や柱穴列跡以外にも、「柱穴跡」が残されている。これらは「ピット」として報告することとした（ピットの項参照）。ピットとして報告したものについても、本来は建物を構成する柱穴であったと考えられるが、これらは現地調査だけでなく、整理段階においても検討を行った結果、建物として認定できなかった柱穴である。したがって、今回の調査区内ではさらに建物跡が存在したことが想定される。また、建物として認定したものの中には、調査区外に延びていると想定したものもあり、実際は建物ではない可能性があるものも含まれている。このことから、今回報告する建物跡については、今後の周辺の発掘調査や掘立柱建物研究の進展、建物群の再検討等により、変更・追加する可能性がある。



第20図　掘立柱建物跡・柱穴列　遺構配置図



第21図　ＳＢ１～７　掘立柱建物跡（１）

第6表　日向北遺跡　掘立柱建物跡　属性表

遺構No.	建物間数 桁行	建物間数 梁行	棟方向	平面規模 桁行総長（m）/測定柱列/柱間寸法（m）		平面規模 梁行総長（m）/測定柱列/柱間寸法（m）		建物の方向 建物軸斜角度/真北基準		備考【構成Pit・重複関係・その他】
SB-1	2以上	3	東西？	(5.0)以上	北	2.6+2.4+～	(6.9)	西	(2.2)+(2.2)+(2.5)	東20°　N-20°-E	構成Pit：P1・2・7・12・13
SB-2	2	1以上	南北？	9.2	西	4.5+5.7	3.8以上	北	**3.8+～**	東20°　N-20°-E	構成Pit：P5・6・9・22 P10より新しい
SB-3	2	(1)+1以上	南北？	8.3	西	4.3+4.0	－	北	**3.5+～**	東27°　N-27°-E	構成Pit：P11・14・18・20・38 SB5より古い 身舎西側に関×1間の張出が付く
SB-4	2	2	南北	6.5	西	3.0+3.5	5.6	南	3.6+2.0	東21°　N-21°-E	構成Pit：P15・26・32・39・42・72 P25より古い
SB-5	2	1	南北	5.4	東	2.7+2.7	4.3	南	4.3	東18°　N-18°-E	構成Pit：P17・23・31・37・41 SB3より新しい
SB-6	1	3	南北	3.7	西	3.7	2.8	南	0.5+1.5+0.8	東41°　N-41°-E	構成Pit：P16・29・30・33・34・67・69 P28より古い
SB-7	2	1以上	南北？	4.6	西	(2.3)+2.3	1.6以上	南	1.6+～	東43°　N-43°-E	構成Pit：P36・40・70

※平面規模の（ ）内の数値は推定値。
※建物が調査区外に延びているため規模が不明な建物や、柱の一部が残存していない建物については、下記のとおり表記した。
○調査区外に延びる建物・・・建物間数：●以上×1間）、　平面規模：総長を（●m以上）と表記　，柱間寸法：（●）・（●～）と表記。
○柱穴の一部が残存していない建物・・・総長・柱間寸法は推定値（数字）で計測し、総長（6.6）、（2.2－（2.2）－（2.4））と表記。
※建物間数の欄で（2+1）とあるのは、「身舎2間、南側または東側に張（または張出し）1間」であることを示す。
※柱間寸法は、東西方向のものは西から、南北方向のものは北から順に記した。　柱間寸法のゴシック体数字は廂または張出しの柱間寸法を示す。

第7表　日向北遺跡　掘立柱建物跡　柱穴跡　属性表

遺構番号		柱穴属性 平面形	長軸	短軸	残存深	検出深	埋土 埋土	柱痕跡 平面形	長軸	短軸	埋土	柱間数	備考（重複・出土遺物等）
SB-1	P1	円形	27	25	30	21.8	30a	円形	11	11	10	36	
	P2	円形	24	22	9	21.3	柱穴:23a	－	－	－	－	－	包含物
	P7	円形	26	24	44	20.9	108i	円形	15	15	16	5	埋1:炭片・粗化黄色土
	P12	楕円形	23	20	70	21.1	柱穴:108a	－	－	－	－	－	包含物
	P13	円形	30	27	30	21.1	108a	円形	14	13	16	36	
SB-2	P5	楕円形	40	30	30	21.2	柱穴:25g+1	－	－	－	－	－	埋1:炭片少量 包含物
	P6	楕円形	36	49	25	21.7	柱穴:14c+1 柱穴:23e	－	－	－	－	－	埋1:炭片微量 包含物
	P9	円形	32	30	20	21.8	柱穴:25g+1	－	－	－	－	－	P10より新、柱穴数
	P22	円形	25	23	30	21.8	柱穴:14c 柱穴:25c	－	－	－	－	－	埋1:炭片少量 包含物
SB-3	P11	円形	26	26	30	21.8	柱穴:34c	－	－	－	－	－	包含物
	P14	円形	26	24	35	22.5	柱穴:34c	－	－	－	－	－	包含物
	P18	円形	24	22	40	22.2	柱痕:23a+1 柱痕:23a	円形	23	20	16	4+	埋1:炭片少量
	P20	楕円形	26	30	36	21.8	23g	楕円形	17	13	26	4+	土師器
	P38	楕円形	32	1423	40	21.3	柱痕:15h 柱痕:15c	円形	14	13	26	5	SB3・P37より不古
SB-4	P15	円形	24	20	20	22.5	柱穴:34c	－	－	－	－	－	包含物
	P26	円形	135	22	20	22.4	34c	円形	15	13	26	4+	P25より不古
	P32	円形	25	23	30	21.3	柱穴:23d 柱穴:23e	－	－	－	－	－	包含物
	P39	円形	28	27	26	21.7	34e+1	円形	11	9	26	4+	埋1:炭片微量
	P42	円形	27	24	26	21.5	23g	楕円形	21	15	26	3+	
	P72	楕円形	29	26	－	－	柱穴:34h 柱穴:23c	－	－	－	－	－	包含物
SB-5	P17	円形	26	24	27	22.2	柱穴:24d	－	－	－	－	－	包含物
	P23	円形	26	25	30	22.4	柱穴:24e+1	－	－	－	－	－	P31より新、柱穴数
	P31	円形	22	20	20	22.0	40e	円形	15	12	26	3+	埋1:炭片少量
	P37	楕円形	25	21	8	21.8	柱穴:24g	－	－	－	－	－	SB3・P38より新 包含物
	P41	円形	24	24	30	22.2	柱穴:24g	－	－	－	－	－	包含物
SB-6	P16	楕円形	28	21	30	22.2	柱穴:14c	－	－	－	－	－	包含物
	P29	楕円形	26	26	32	22.2	40e	円形	13	12	26	3+	P28より不古
	P30	円形	25	24	30	22.2	柱穴:24g	－	－	－	－	－	包含物
	P33	円形	23	24	26	22.2	柱穴:24c	－	－	－	－	－	包含物
	P34	円形	26	26	40	22.0	柱穴:28f	－	－	－	－	－	包含物
	P67	円形	28	24	－	－	柱穴:14c	－	－	－	－	－	包含物
	P69	円形	21	19	－	－	柱穴:14c	－	－	－	－	－	包含物
SB-7	P36	円形	28	23	30	21.8	24e	円形	11	13	24	4+	
	P40	円形	28	27	30	22.8	柱穴:24g	－	－	－	－	－	包含物
	P70	円形	25	25	－	－	柱穴:24g	－	－	－	－	－	包含物

●ピット（柱穴・小穴）類型

【柱痕型】

あ：柱痕跡が柱穴断方面に接するもの

い：柱痕跡が柱穴断方面まで至らないもの

う：柱痕跡が柱穴断方面に接するうえに下に延びるもの

【柱痕・埋方の埋土物型】

■土色

1：暗褐色（10YR3/3）　2：暗褐色（10YR3/4）　3：褐色（10YR4/4）　4：褐色（10YR4/6）
5：黄褐色（10YR5/6）　6：黄褐色（10YR5/8）　7：明黄褐色（10YR6/8）
8：暗褐色（7.5YR3/4）　9：褐色（7.5YR4/4）　10：褐色（7.5YR4/6）

■土性

a：シルト　b：砂質シルト

■混入物

a：地山ブロック多く含む　b：地山ブロック含む　c：地山ブロック少量含む
d：地山ブロック微量含む　e：地山粒子多く含む　f：地山粒子少量含む
g：地山粒子少量含む　h：地山粒子微量含む
i：その他（上記以外のもの等）
※i を選択した場合は備考欄に埋土混入物を記載
備考欄編の頭数から、下記の内容について記載を省略した
・前化物片・炭片、粘土ブロック・粘土プ

【記載例】
1a・・・土色：暗褐色（10YR3/3）、土性：シルト、混入物：地山ブロック多く含む

●その他の記載事項

■柱穴・ピットの評価欄
・推定値：は推定値を示す

■柱穴・ピット重複の「埋土・埋土」「埋土」記載事項
・柱穴の場合は「新方埋」を記載する
・「1 番・2 番」等の記載：「柱穴・小穴」の埋土等が 2 番以上に分類した場合を示す
・「抜穴」：柱抜き取り穴の埋土・埋土／「抜穴 1」：抜き取り穴 1 番の埋土・埋土
・「切穴」：柱切り取り穴の埋土・埋土／「切穴 1」：切き取り穴 1 番の埋土・埋土

■出土遺物の記載事項
・柱抜取：柱が抜き取られているもの　・柱切取：柱が切り取られているもの
・この他、重複関係・出土遺物を記載

①掘立柱建物跡・柱穴列跡の立地

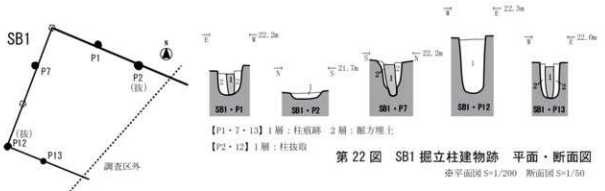
掘立柱建物跡群は調査区中央東側の標高21～23mの比較的平坦な緩斜面に位置する。柱穴列跡は標高25mの斜面に立地し、東側に高低差約2mの崖状の落ち込みが確認された。これらの建物跡群と柱穴列跡は緩斜面に立地する建物群に対し、西側斜面上に柱穴列跡が立地するという位置関係にある（第6・20図）。周囲の地形と比較する限り、調査区北側・南側斜面には、急な崖状の落ち込みは確認されないことから、調査区中央東側の建物跡群・柱穴列跡が立地する地形は、斜面を掘削し、人為的に造り出された地形であると考えられる。

②掘立柱建物跡

調査区東側で7棟検出した。それぞれの特徴等については第6・7表にまとめた。

【ＳＢ１　掘立柱建物跡】（第20・21・22図、第6・7表）

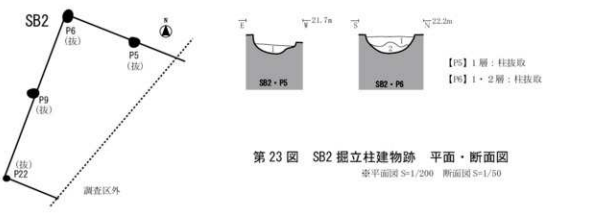
東西2間以上、南北3間の建物跡である。建物東側は、調査区外へ延びている。建物は、P1・2・7・12・13の5個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、3個(P1・7・13)で柱痕跡を確認し、2個(P2・12)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が北側柱列で総長5.0m以上、柱間寸法は西から2.6m・2.4m、梁行が西側柱列で総長6.9m、柱間寸法は北から2.2m・2.2m・2.5m（推定値）である。方向は、真北に対して東に20°傾く（N-20°-E）。柱穴は長軸30～37cmの円形・隅丸方形で、深さは9～70cmである。柱痕跡は、長軸11～15cmの円形である。



第22図　SB1掘立柱建物跡　平面・断面図
※平面図S=1/200　断面図S=1/50

【ＳＢ２　掘立柱建物跡】（第20・21・23図、第6・7表）

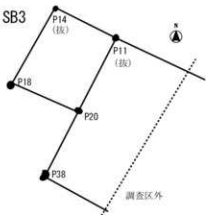
南北2間、東西1間以上の建物跡である。建物東側は、調査区外へ延びている。P10と重複し、これより新しい。建物は、P5・6・9・22の4個の柱穴で構成される。検出した柱穴は全ての柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が西側柱列で総長9.2m、柱間寸法は北から4.5m・5.7m、梁行が北側柱列で総長3.8m以上、柱間寸法は西から3.8mである。方向は、真北に対して東に20°傾く（N-20°-E）。柱穴は長軸25～60cmの円形・楕円形で、深さは10～30cmである。

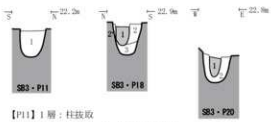


第23図　SB2掘立柱建物跡　平面・断面図
※平面図S=1/200　断面図S=1/50

【ＳＢ３掘立柱建物跡】（第 20・21・24 図、第 6・7 表）

南北２間、東西１間以上の身舎の西側に南北１間・東西１間の張出しが付く建物跡である。建物東側は、調査区外へ延びている。SB5 と重複し、これより古い。建物は、P11・14・18・20・38 の５個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、３個(P18・20・38)で柱痕跡を確認し、２個(P11・14)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が西側柱列で総長 8.3m、柱間寸法は北から 4.3m・4.0m である。張出しは西側柱列からの出が 3.5m、南北 4.6m である。方向は、真北に対して東に 27°傾く（N-27°-E）。柱穴は長軸 26～55cm の円形・楕円形で、深さは 20～60cm である。柱痕跡は、長軸 14～23cm の円形・楕円形である。遺物は、P20 の掘方埋土から土師器片が出土した。



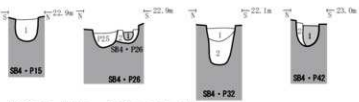


【P11】１層：柱抜取
【P18】１層：柱痕跡　２・３層：掘方埋土
【P20】１層：柱痕跡　２層：掘方埋土

第 24 図　SB3 掘立柱建物跡　平面・断面図
※平面図 S=1/200　断面図 S=1/50

【ＳＢ４掘立柱建物跡】（第 20・21・25 図、第 6・7 表）

南北２間、東西２間の南北棟建物跡である。P25 と重複し、これより古い。建物は、P15・26・32・39・42・72 の６個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、３個(P26・39・42)で柱痕跡を確認し、３個(P15・32・72)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が西側柱列で総長 6.5m、柱間寸法は北から 3.0m・3.5m、梁行が北側柱列で総長 5.6m、柱間寸法は西から 3.6m・2.0m である。方向は、真北に対して東に 21°傾く（N-21°-E）。柱穴は長軸 27～35cm の円形・楕円形で、深さは 18～52cm である。柱痕跡は、長軸 11～21cm の円形・楕円形である。



【P15】１層：柱抜取　【P32】１・２層：柱抜取
【P26・42】１層：柱痕跡　２層：掘方埋土

第 25 図　SB4 掘立柱建物跡　平面・断面図
※平面図 S=1/200　断面図 S=1/50

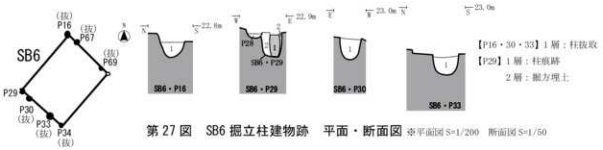
【ＳＢ５掘立柱建物跡】（第 20・21・26 図、第 6・7 表）

南北２間、東西１間の南北棟建物跡である。SB3、P24 と重複し、これらより新しい。建物は、P17・23・31・37・41 の５個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、１個(P31)で柱痕跡を確認し、４個(P17・23・37・41)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が東側柱列で総長 5.4m、柱間寸法は北から 2.7m・2.7m、梁行が北側柱列で総長 4.3m である。方向は、真北に対して東に 18°傾く（N-18°-E）。柱穴は長軸 23～35cm の円形・楕円形で、深さは 8～55cm である。柱痕跡は、長軸 15cm の円形である。

第 26 図　SB5 掘立柱建物跡　平面・断面図
※平面図 S=1/200　断面図 S=1/50

【ＳＢ６　掘立柱建物跡】（第 20・21・27 図、第 6・7 表）

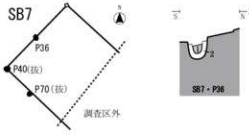
南北 1 間、東西 3 間の南北棟建物跡である。建物は、P16・29・30・33・34・67・69 の 7 個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、1 個(P29)で柱痕跡を確認し、6 個(P16・30・33・34・67・69)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が西側柱列で総長 3.7m、梁行が南側柱列で総長 2.8m、柱間寸法は北から 0.5m・1.5m・0.8m である。方向は、真北に対して東に 41° 傾く（N-41° -E）。柱穴は長軸 21～35cm の円形・楕円形で、深さは 10～32cm である。柱痕跡は、長軸 15cm の円形である。



第 27 図　SB6 掘立建物跡　平面・断面図 ※平面図 S=1/200　断面図 S=1/50

【ＳＢ７　掘立柱建物跡】（第 20・21・28 図、第 6・7 表）

南北 2 間、東西 1 間以上の建物跡である。建物東側は、調査区外へ延びている。建物は、P36・40・70 の 3 個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、1 個（P36）で柱痕跡を確認し、2 個(P40・70)は柱が抜き取られていた。平面規模については、桁行が西側柱列で総長 4.6m、柱間寸法は北から 2.3m（推定値）・2.3m、梁行が南側柱列で総長 1.6m 以上である。方向は、真北に対して東に 43° 傾く（N-43° -E）。柱穴は長軸 25～29cm の円形で、深さは 10～20cm である。柱痕跡は、長軸 13cm の円形である。



第 28 図
SB7 掘立柱建物跡
平面・断面図
※平面図 S=1/200
断面図 S=1/50

1. 掘立柱建物跡　完掘状況（西から）

2. SB1・P1　断面（東から）

3. SB1・P7　断面（南から）

4. SB1・P13　断面（南から）

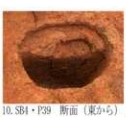
5. SB2・P5　断面（南から）

6. SB2・P9　断面（南から）

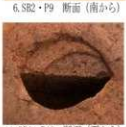
7. SB3・P18　断面（北から）

8. SB3・P20　断面（西から）

9. SB4・P26　断面（西から）



10. SB4・P39　断面（東から）



11. SB4・P42　断面（西から）

12. SB5・P31　断面（西から）

13. SB6・P29　断面（西から）

14. SB7・P36　断面（東から）

15. 掘立柱建物跡・柱穴列跡の立地状況
※写真左下が掘立柱建物跡群（東から）

第29図　ＳＢ１～７　掘立柱建物跡（２）

③柱穴列跡

調査区中央部分で３条検出した。それぞれの特徴等については第８・９表にまとめた。

【ＳＡ１　柱穴列跡】（第30図、第８・９表）

南北方向に延びる４間の柱穴列である。柱穴列はP46・48・50・52・54の５個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、２個（P48・50）で柱痕跡を確認し、３個（P46・52・54）は柱が抜き取られていた。総長8.9m で、柱間寸法は北から2.0m・2.1m・2.5m・2.3m である。方向は、真北に対して東に29°傾く（N-29°-E）。柱穴は長軸22～33cm の円形・楕円形で、深さは17～33cm である。柱痕跡は、長軸14～15cm の円形・楕円形である。

【ＳＡ２　柱列跡】（第30図、第８・９表）

南北方向に延びる５間の柱穴列である。柱穴列はP47・49・51・53・55・61の６個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、４個（P49・51・53・55）で柱痕跡を確認し、２個（P47・61）は柱が抜き取られていた。総長11.9m で、柱間寸法は北から2.5m・2.4m・2.1m・2.1m・2.8m である。方向は、真北に対して東に26°傾く（N-26°-E）。柱穴は長軸25～30cm の円形で、深さは10～50cm である。柱痕跡は、長軸11～18cm の円形・楕円形である。

【ＳＡ３　柱列跡】（第30図、第８・９表）

南北方向に延びる５間の柱穴列である。柱穴列はP56・57・58・59・60・62の６個の柱穴で構成される。検出した柱穴のうち、３個（P57・58・59）で柱痕跡を確認し、３個（P56・60・62）は柱が抜き取られていた。総長11.1m で、柱間寸法は北から2.5m・2.2m・2.1m・2.1m・2.2m である。方向は、真北に対して東に27°傾く（N-27°-E）。柱穴は長軸35～50cm の円形・楕円形で、深さは23～45cm である。柱痕跡は、長軸16～25cm の円形・楕円形である。遺物は、P59 の掘方埋土から土師器片が出土した。

第8表　日向北遺跡　柱穴列跡　属性表

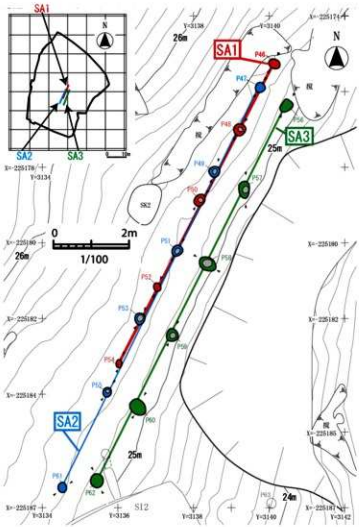
遺構No.	規模	方向	平面規模		柱穴列の方向	備考
			桁行総長（m）/柱間寸法（m）			【構成P.t・重複関係・その他】
SA-1	4間	南北	8.9	2.0+2.1+2.5+2.3	東29°　N-29°-E	構成P.t：P46・48・50・52・54
SA-2	5間	南北	11.9	2.5+2.4+2.1+2.1+2.8	東26°　N-26°-E	構成P.t：P47・49・51・53・55・61
SA-3	5間	南北	11.1	2.5+2.2+2.1+2.1+2.2	東27°　N-27°-E	構成P.t：P56・57・58・59・60・62

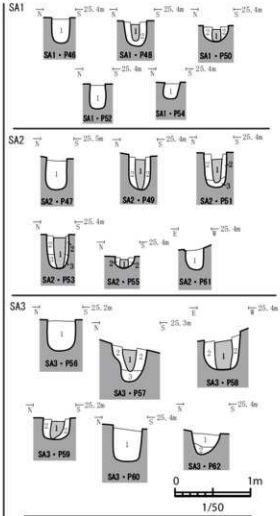
※平面規模の（ ）内の数値は推定値。
※柱間寸法は、東西方向のものは西から、南北方向のものは北から順に記した。

第9表　日向北遺跡　柱穴列　柱穴跡　属性表

遺構番号	柱穴・ピット堀方（長軸・短軸：m、底面標高：m）						柱痕跡				柱種型	備考
		平面形	長軸	短軸	残存深	底面標高	埋土堆土	平面形	長軸	短軸	堆土		
SA-1	P46	楕円形	33	24	33	24.9	抜穴:1Ba	—	—	—	—	—	柱抜取
	P48	円形	28	26	30	24.9	3Ac	楕円形	15	11	3A	いい	
	P50	円形	30	27	20	24.9	4Ba	円形	14	12	2A	あ	柱抜取 土師器
	P52	円形	24	23	30	24.8	抜穴:3Ab	—	—	—	—	—	柱抜取
	P54	円形	22	20	17	25.0	抜穴:1Ac	—	—	—	—	—	柱抜取
SA-2	P47	円形	29	27	39	24.8	抜穴:4Ae	—	—	—	—	—	柱抜取
	P49	円形	25	24	50	24.7	2Ac・e	楕円形	15	11	2A	あ	
	P51	楕円形	30	30	45	24.7	堀埋:1Aa 堀埋:4Ae	楕円形	17	12	2A	いい	
	P53	円形	30	28	42	24.7	堀埋:1Aa 堀埋:3Aa	円形	18	16	2A	いい	
	P55	円形	30	30	10	25.0	4Be	円形	11	10	2A	あ	
	P61	円形	27	26	27	24.8	抜穴:1Ba	—	—	—	—	—	柱抜取
SA-3	P56	円形	35	32	40	24.6	抜穴:2Ba	—	—	—	—	—	柱抜取
	P57	楕円形	45	32	45	24.5	堀埋:1Bd 堀埋:3Ac	円形	16	15	2A	いい	
	P58	楕円形	50	35	43	24.5	3Ac・g	楕円形	25	21	2A	あ	
	P59	円形	39	35	23	24.6	4Ae	円形	17	16	2A	あ	土師器
	P60	円形	40	40	43	24.6	抜穴:1Ac	—	—	—	—	—	柱抜取
	P62	円形	38	35	28	24.7	抜穴:2Ba 抜穴:4Ae	—	—	—	—	—	柱抜取

●ピット（柱穴・小穴）類型





●【SA1 P46・52・54,SA2 47・61,SA3 56・60・62】
1・2層：柱抜取
●【上記以外】1層：柱痕跡、2・3層：掘方埋土
※土層の詳細については第9表参照。

1. SA1 ～ 3 柱穴列跡 完掘状況（西から）

2. SA1・P48 断面（北から）

3. SA2・P51 断面（北から）

4. SA2・P53 断面（北から）

5. SA3・P58（東から）

第30図　ＳＡ１～３　柱穴列跡

（3）溝跡

調査区南部の標高 24～25m の緩斜面で 1 条検出した。

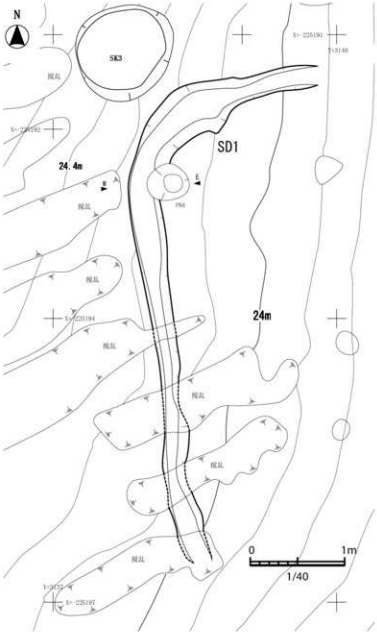
【ＳＤ１　溝跡】（第 31・37 図、第 10 表）

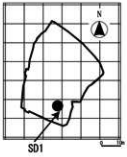
南北と東西に延びるＬ字状の溝で、溝の北東側と南側は後世の撹乱により削平を受け残存していない。P64 と重複し、これより古い。検出長は南北 4.71m・東西 1.77m で、上幅 0.24～0.58m、下幅 0.09～0.31m、深さ 0.10～0.15m である。底面の標高は、溝の北側が高く、南側が低い。溝の断面形はＵ字形である。堆積土は自然堆積の単層である。遺物は、1 層から土師器片が出土した。

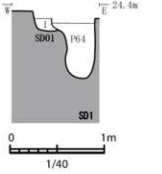
なお、ＳＤ１については、現地調査時周囲に周溝を伴う竪穴住居跡が存在することから、住居の周溝跡である可能性を想定して精査を行った。しかし、溝の周囲に炉やカマド、柱穴などを確認することができなかったため、竪穴住居の周溝として認定できなかった。したがって今回はＳＤとして取り扱うこととした。

第10表　日向北遺跡　溝跡　属性表

遺構No.	検出長(m)	方向	規模(m) 上幅	下幅	深さ	断面形	堆積土	出土遺物	備考
SD1	南北4.71 東西1.77	東西・南北	0.24～0.58	0.09～0.31	0.10～0.15	U字形	自然	土師器	P64より古い。L字形の溝。







層	土色	土性	備考
1	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロック多量含む。

第31図　ＳＤ１　溝跡

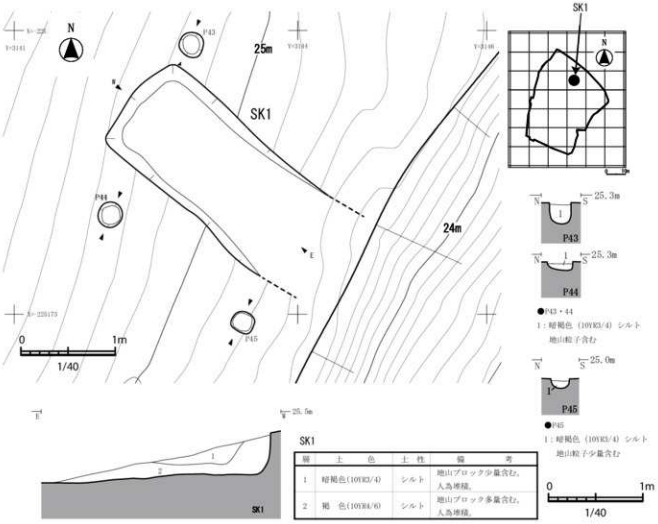
（4）土坑

土坑５基を検出した。それぞれの特徴等については第 11 表にまとめた。

【ＳＫ１土坑】（第 32・37 図、第 11 表）

調査区北側の標高 24.5～25.3m の緩斜面に立地する。確認面はＶa 層である。ＳＫ１の東側は残存していない。平面形は長軸 2.10m 以上、短軸 1.00m の東西方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、深さは 45cm である。長軸方向の断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は２層に分かれ、いずれも人為堆積である。遺物は出土していない。

なお、ＳＫ１の周辺ではピットを３個（P43・44・45）検出した。これらのピットは、ＳＫ１を囲むように配置されており、周囲に掘立柱建物跡や柱穴列が存在しないことから、ＳＫ１に関連する遺構である可能性が考えられる。



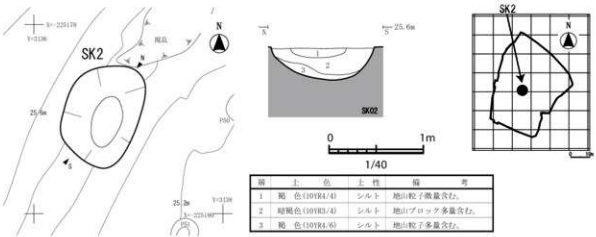
SK1

層	土　色	土　性	備　考
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロック少量含む。人為堆積。
2	褐　色(10YR4/6)	シルト	地山ブロック多量含む。人為堆積。

第32図　ＳＫ１　土坑

【ＳＫ２土坑】（第 33・37 図、、第 11 表）

調査区中央部の標高 25.3～25.6m の緩斜面に立地する。確認面はＶａ層である。平面形は、長軸 1.00m、短軸 0.80m の南北方向に長軸をもつ楕円形を呈し、深さは 30cm である。長軸方向の断面形はＵ字形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は 3 層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。

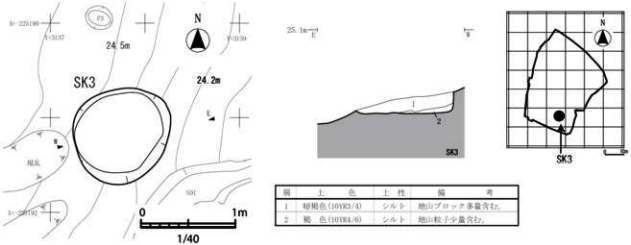


層	土　色	土 性	備　　考
1	褐　色(10YR4/4)	シルト	地山粒子微量含む。
2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロック多量含む。
3	褐　色(10YR4/6)	シルト	地山粒子多量含む。

第33図　ＳＫ２　土坑

【ＳＫ３土坑】（第 34・37 図、第 11 表）

調査区南側の標高 24.2～24.5m の緩斜面に立地する。確認面はＶａ層である。平面形は、長軸 1.05m、短軸 1.00m のほぼ円形を呈し、深さは 16cm である。断面形はＵ字形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は 2 層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。



層	土　色	土 性	備　　考
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロック多量含む。
2	褐　色(10YR4/6)	シルト	地山粒子少量含む。

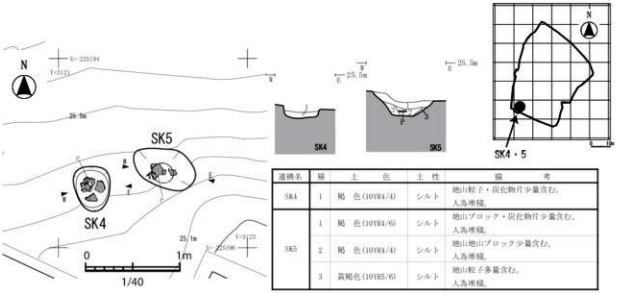
第34図　ＳＫ３　土坑

【ＳＫ４土坑】（第 35・36・38・39 図、第 11 表）

調査区南西側の標高 25.2～25.4m の緩斜面に立地する。確認面はＶa 層である。平面形は、長軸 0.42m、短軸 0.35m の南北方向に長軸をもつ楕円形を呈し、深さは 12cm である。長軸方向の断面形はＵ字形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は 1 層で、人為堆積である。遺物は土師器甕（第 36 図 1・2）が出土した。

【ＳＫ５土坑】（第 35・36・38・39 図、第 11 表）

調査区南西側の標高 25.2～25.4m の緩斜面に立地する。確認面はＶa 層である。平面形は、長軸 0.64m、短軸 0.43m の東西方向に長軸をもつ楕円形を呈し、深さは 16cm である。長軸方向の断面形はＵ字形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は 3 層に分かれ、いずれも人為堆積である。遺物は土師器坏（第 36 図 3～5）・甕（第 36 図 6～7）、須恵器甕（第 36 図 8）が出土した。



遺構名	層	土色	土性	備考
SK4	1	褐色(10YR4/4)	シルト	地山粒子・炭化物片少量含む。人為堆積。
SK5	1	褐色(10YR4/6)	シルト	地山ブロック・炭化物片少量含む。人為堆積。
	2	褐色(10YR4/4)	シルト	地山地山ブロック少量含む。人為堆積。
	3	黄褐色(10YR5/6)	シルト	地山粒子多量含む。人為堆積。

第35図　ＳＫ４・５　土坑

第11表　日向北遺跡　土坑　属性表

遺構No.	平面形	規模(m)	深さ(m)	断面形	堆積土	出土遺物	備考
SK 1	隅丸長方形?	(2.10)×1.00	0.45	逆台形	人為	－	東側削平を受ける P62～63関連遺構か?
SK 2	楕円形	1.00×0.80	0.30	U字形	自然	－	
SK 3	円形	1.05×1.00	0.16	U字形	自然	－	
SK 4	楕円形	0.42×0.35	0.12	U字形	人為	土師器	
SK 5	楕円形	0.64×0.43	0.16	U字形	人為	土師器・須恵器	

（5）ピット（第6図、第12表）

ピットには、柱痕跡が認められる「柱穴跡」と、柱痕跡が認められない「小穴跡」がある。このうち、本項で報告する「柱穴」は、本来は掘立柱建物や柱穴列などを構成する柱穴であったと考えられるが、現地調査・整理作業段階において、これらを構成する建物跡を認定することができなかったため、ここではピットとして報告することとした。

ピットは、調査区内で20個検出した（第6図）。確認面はⅣ～Ⅴ層である。それぞれの規模、柱痕跡の有無、堆積土・埋土、重複関係等については第12表にまとめた。これらのピットは、長軸18～46㎝、短軸15～44㎝の円形・楕円形を呈し、深さは7～56㎝である。20個中3個（P4・35・68）で直径15～20㎝の円形・楕円形の柱痕跡を確認した。これらのピットは調査区の中央やや西寄りの緩斜面と、調査区東側の緩斜面に分布するが、特に調査区東側に多く分布している。遺物はP25・63から土師器片が出土した。

第12表　日向北遺跡　ピット　属性表

遺構番号	種類	柱穴・小穴属性（長軸・短軸 ㎝、長さ(深さ) ㎝）						柱痕跡				切り合い関係	備考
		平面形	長軸	短軸	残存深	底面標高	埋土埋土	平面形	長軸	短軸	埋土		
P2	小穴	円形	35	33	14	31.4	4Hr	—	—	—	—		
P4	柱穴	円形	34	32	37	31.2	2Ar	円形	20	19	2A	3A	
P10	小穴	円形	(33)	30	30	31.4	1Hbr	—	—	—	—		(B)・P9より古
P19	小穴	円形	30	27	37	31.2	1Ar・1	—	—	—	—		極小炭片少量
P21	小穴	円形	26	25	20	31.1	2Ar・1	—	—	—	—		極小炭片微量
P24	小穴	楕円形	36	(15)	7	31.8	4Br	—	—	—	—		(B)・P23より古
P25	小穴	楕円形	36	23	16	32.4	3Ar	—	—	—	—		(B)・P26より新 土師器
P27	小穴	円形	30	18	17	32.3	3Ar	—	—	—	—		
P28	小穴	円形	34	22	8	32.6	4Ar	—	—	—	—		(B)・P29より新
P35	柱穴	円形	23	23	12	31.9	3Ar	円形	13	13	3A	3A	
P43	小穴	円形	34	23	30	33.3	3AC	—	—	—	—		
P44	小穴	円形	34	22	7	33.1	3AC	—	—	—	—		
P51	小穴	円形	32	30	8	34.7	3Ag	—	—	—	—		
P62	小穴	円形	35	23	10	33.8	2Ar	—	—	—	—		土師器
P64	小穴	円形	40	44	53	33.8	1Hg・1Ag・2Ag・4Ar	—	—	—	—		(B)より新
P65	小穴	円形	29	29	27	36.6	4Ar	—	—	—	—		
P66	小穴	円形	21	21	10	36.3	5Ar	—	—	—	—		(C)より新
P68	柱穴	円形	18	15	7	37.7	4Ar・1	楕円形	13	12	4A	1）	極小炭片 (C)より新
P71	小穴	円形	25	23	8	37.8	4Ar	—	—	—	—		(D)より新
P73	小穴	円形	22	20	19	37.9	4Ar	—	—	—	—		極小炭片微量 (E)より新

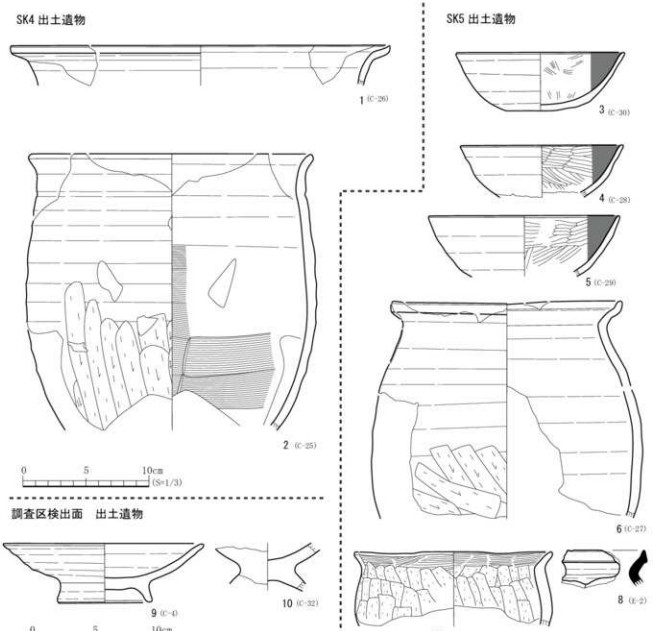
●ピット（柱穴・小穴）類型

●その他の記載事項

■柱穴・ピットの計測値
・（数値）は推定値を示す
■柱穴・ピット新欄の「埋土・埋土（堆積土）」記載事項
・柱穴の場合は「柱穴埋土」を意味する
・「1層・2層」等の記載：「柱穴・小穴」の埋土等が2層以上に分層した場合を示す
・「抜穴」：柱抜き取り穴の埋土・堆積土／「抜穴1」：抜き取り穴1層の埋土・堆積土
・「切穴」：柱切り取り穴の埋土・堆積土／「切穴1」：切き取り穴1層の埋土・堆積土
■備考欄の記載事項
・柱抜取：柱が抜き取られているもの　・柱切取：柱が切り取られているもの
・この他、重複関係・出土遺物を記載

（6）遺構検出面、排土等出土遺物（第36図）

このほか、遺構検出面・排土・撹乱等から土師器・須恵器・陶器・鉄製品等が出土した。このうち図示できたものは、遺構検出面から出土した土師器高台付皿（第36図9）・台付甕（第36図10））である。



No.	層	種別	器種	残存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SK4 堆積土	土師器	甕	口縁部	外面：ロクロナデ，内面：ロクロナデ，色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/4)，内面・にぶい橙色(7.5YR6/4)、法量：口径(30.0)cm・残存高3.2cm・器厚0.4～0.5cm	C-26
2	SK4 堆積土	土師器	甕	口縁部 ～胴部	外面：ロクロナデ・胴部下半ヘラ削り，内面：ロクロナデ・胴部ヘラナデ，色調：外面・明褐色(7.5YR5/6)，内面・にぶい褐色(7.5YR5/4)，法量：口径22.4cm・残存高22.6cm・器厚0.6～0.9cm	C-25
3	SK5 堆積土	土師器	坏	口縁部 ～底部	外面：ロクロナデ・底部切り離し技法不明(磨滅)・煤付着，内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅・器面焼けはじけ，色調：外面・明赤褐色(2.5YR5/6)，内面：黒褐色(10YR3/1)，法量：口径13.2cm・器高4.6cm・底径5.5cm・器厚0.3～0.6cm，打型痕？	C-30
4	SK5 堆積土	土師器	坏	口縁部 ～胴部	外面：ロクロナデ，内面：ヘラミガキ・黒色処理，色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、内面・黒褐色(10YR3/1)，法量：口径(12.8)cm・残存高4.2cm・器厚0.3～0.5cm	C-28
5	SK5 堆積土	土師器	坏	口縁部 ～胴部	外面：ロクロナデ，内面：ヘラミガキ・黒色処理，色調：外面・赤褐色(2.5YR4/6)、内面・黒褐色(10YR3/1)，法量：口径(15.0)cm・残存高4.8cm・器厚0.4～0.5cm	C-29
6	SK5 堆積土	土師器	甕	口部 ～胴部	外面：ロクロナデ・胴部ヘラ削り，内面：ロクロナデ，色調：外面・橙色(5YR7/6)、内面・橙色(7.5YR7/6)，法量：口径18.2cm・残存高17.3cm・器厚0.5～0.8cm	C-27
7	SK5 2層	土師器	甕	口部 ～胴部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラ削り，内面：口縁部ヨコナデ・ヘラ削り，色調：外面・赤褐色(2.5YR4/6)、内面・にぶい赤褐色(2.5YR4/4)，法量：口径(15.6)cm・残存高5.9cm・器厚0.5～0.9cm	C-31
8	SK5 2層	須恵器	甕	口縁部	外面：ロクロナデ，内面：ロクロナデ，色調：内外面・黄灰色(2.5Y4/1)，法量：器厚0.6cm	E-2
9	調査区 検出面	土師器	高台付皿	口縁部 ～底部	外面：ロクロナデ，底部切離糸切り？→高台貼付，内面：ロクロナデ，色調：内外面・にぶい橙色(7.5YR6/4)、法量：口径15.8cm・器高4.7cm・底径7.3cm・器厚0.5～0.9cm、赤焼土器	C-4
10	調査区 検出面	土師器	台付甕？	脚部	外面：磨滅のため不明，内面：磨滅のため不明・脚部内側に煤付着，色調：外面・明赤褐色(5YR4/6)、内面・にぶい赤褐色(5YR4/4)・黒褐色(10YR3/1)，法量：残存高3.8cm・器厚0.8～1.6cm	C-32

第36図　ＳＫ４・５土坑、調査区検出面　出土遺物

1. ＳＤ１溝跡　完掘状況（南から）

2. ＳＫ１土坑　断面状況（北東から）

3. ＳＫ１土坑　完掘状況（北東から）

4. ＳＫ２土坑　断面状況（北西から）

5. ＳＫ２土坑　完掘状況（北西から）

6. ＳＫ３土坑　断面状況（北から）

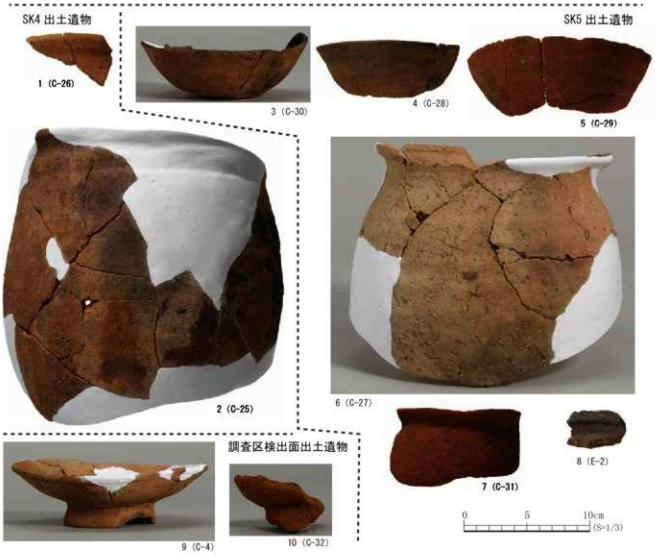
7. ＳＫ３土坑　完掘状況（北から）

第37図　ＳＤ１溝跡、ＳＫ１・２・３土坑

1. ＳＫ４土坑　遺物出土状況（南から）

1. ＳＫ５土坑　遺物出土状況（南から）

第38図　ＳＫ４・５　土坑　遺物出土状況



第39図　ＳＫ４・５、調査区検出面出土遺物（２）

第Ⅳ章　総　括

今回の調査で検出した遺物・遺構について、ここでは、その特徴や時期を検討し、本遺跡における各時代の特徴をまとめる。

1. 出土遺物の特徴と時期

今回の日向北遺跡の調査で出土した遺物は、土師器、須恵器、陶磁器、鉄製品、土製品、石器などである。出土した土器類の総数は 520 点（約 19,010g）で、その内訳は、土師器が 482 点（約 13,290g）、須恵器が 33 点（約 5,625g）、陶磁器が 5 点（約 95g）である。これらの出土遺物のうち、本報告では、土器類 35 点、土製品 1 点について図示した。なお、それぞれの遺構から出土した遺物については第 13 表にまとめた。

以下、それぞれについて検討を行う。

第13表　日向北遺跡　遺物出土状況

遺構名	出土層位	出土点数【上段：出土点数、下段：乾燥重量（g）】 土師器	須恵器	陶磁器	鉄製品等	土製品	石器類	その他	計
S11	検出面	19 (410)							19 (410)
	堆積土	10 (185)							10 (185)
	カマド煙道	7 (540)							7 (540)
	カマド焼出P	2 (10)							2 (10)
	カマド燃焼部	2 (10)							2 (10)
	周溝 堆積土	14 (1680)							14 (1680)
	SK1 1層	10 (305)							10 (305)
	小計	64 (3140)							64 (3140)
S12	検出面	8 (45)							8 (45)
	堆積土	11 (440)				1 (90)			12 (530)
	カマド燃焼部	5 (180)	1 (20)						6 (200)
	カマド焼出P						1 (1)		1 (1)
	周溝 堆積土	3 (1970)							3 (1970)
	SK1 1層	12 (1115)							12 (1115)
	小計	39 (3750)	1 (20)			1 (90)	1 (1)		42 (3861)
S13	検出面	5 (100)							5 (100)
	堆積土	49 (380)							49 (380)
	1層	4 (15)							4 (15)
	床面	9 (155)	1 (5)						10 (160)
	周溝 堆積土	1 (650)							1 (650)
	SK1 1層	2 (260)							2 (260)
	SK1 2層	16 (40)							16 (40)
	小計	86 (1600)	1 (5)						87 (1605)
S14	堆積土	17 (295)	1 (30)						18 (325)
	床面直上	5 (65)							5 (65)
	小計	22 (360)	1 (30)						23 (390)
SK4	堆積土	4 (4) (785)							4 (785)
	1層	4 (4) (35)							4 (35)
	小計	8 (8) (820)							8 (820)
SK5	堆積土	14 (10) (1065)							14 (1065)
	2層	2 (2) (75)	1 (10)						3 (85)
	小計	16 (12) (1140)	1 (10)						17 (1150)
SD1	堆積土	2 (5)							2 (5)
	1層	4 (10)							4 (10)
	小計	6 (15)							6 (15)
SA3・P59	掘方埋土	1 (10)							1 (10)
SB3・P20	掘方埋土	1 (5)							1 (5)
P25	堆積土	2 (20)							2 (20)
P63	堆積土	1 (5)							1 (5)
検出面		157 (7) (1860)	3 (10)	1 (15)	1 (20)			1 (15)	163 (1520)
撹乱		52 (665)	2 (15)						54 (680)
表採		21 (12) (190)	22 (5465)		1 (570)				44 (5925)
表土			2 (70)						2 (70)
排土				2 (15)					2 (15)
T-1		4 (55)		2 (65)					6 (120)
T-15		2 (55)							2 (55)
合計		482 (39) (13,290)	33 (5,625)	5 (95)	2 (590)	1 (90)	1 (1)	1 (15)	525 (19,406)

※土師器の（　）内の数字は、出土点数の中におけるロクロ土師器の点数である。
※出土遺物点数は、上段の数字が「出土点数」、下段（　）内の数字が「出土遺物の総重量(g)（乾燥重量）」である。
※鉄製品等の内訳は下記のとおり
　検出面出土：鉄製品　　表採：製鉄関連遺物（鉄滓）
※石器類：剥片（石材：泥岩、法量：長1.75cm・幅1.77cm・厚0.34cm）
※その他の遺物：瓦（近世以降）

(1) 土師器

482点（ロクロ土師器39点）出土し、このうち33点を図示した。残りの悪いものが多く、調整を判読できたものは一部である。図示したもののうち、非ロクロ成形の土師器のほとんどはSI1～4竪穴住居跡から出土し、ロクロ成形の土師器はSK4・5土坑及び遺構外から出土した。

以下、竪穴住居跡出土土師器、土坑出土土師器・遺構外出土土師器に分けて検討を行う。

1) 土師器の特徴

①竪穴住居跡（SI1～4）出土土師器

竪穴住居跡からは、土師器が221点出土し、そのうち25点を図示した。

SI1竪穴住居跡では、坏・甕（第9図4～5）が出土した。坏（第9図1）は、丸底で口縁部が湾曲する比較的浅い小型の器形のもので、外面の底部～胴部にヘラ削り・口縁部にヨコナデ、内面にはヘラミガキ・黒色処理を施す。甕には、口縁部が短く頸部で外反するもの（第9図2・4）、頸部にくびれがなく外上方に立ち上がるもの（第9図3）があり、外面の胴部にヘラ削り・頸部～口縁部にヨコナデ、内面の胴部にヘラナデ・口縁部にヨコナデを施すもの（第9図3・5）、胴部にハケメ・口縁部にヨコナデ、内面の頸～胴部にヘラナデ→ナデ・口縁部にヨコナデを施すもの（第9図4）がある。第9図5の甕は胴部最大径が中位にあり、底部がすぼまる器形である。

SI2竪穴住居跡では、坏・鉢・甕・甑（第12図1～9）が出土した。坏（第12図1）は、平底風の丸底で、胴部下端に段がつき、口縁部が内弯する器形の有段丸底坏で、外面は段より下にヘラ削り・上にヨコナデ、内面はヘラミガキ・黒色処理を施す。鉢（第12図2・3）は、口縁部がわずかに外反し湾曲しながら底部にいたる器形のもので、外面の胴部にハケメ・口縁部にヨコナデ、内面の胴部にヘラナデ→ヘラミガキ、口縁部にヨコナデ→ヘラミガキを施し黒色処理を施したもの（第12図2）、外面の胴部にヘラ削り・口縁部にヨコナデ、内面の胴部にヘラナデ・口縁部にヨコナデを施したもの（第12図3）がある。甑（第12図9）は、胴部最大径が下半にある無底もので、外面の頸部にヨコナデ・胴部にハケメ、内面にはヘラナデ→ヘラ削り・ヘラミガキを施す。甕は、外面の頸部にヨコナデ・胴部上半にハケメ・胴部下半にヘラ削り、内面の口縁部にヨコナデ・胴部にヘラナデを施すもの（第12図4～7）が主体で、外面の胴部下半にハケメが残るものもある（第12図8）。このうち、器形が明らかなものは、胴部最大径が下半にある下膨れもので、頸部と口縁部の境に沈線がみられる（第12図4）。

SI3竪穴住居跡では、坏（第16図1～4）・高坏・甕（第16図5）が出土した。坏は、丸底で胴部下端に段がつき、外面の段より下にヘラ削り・上にヨコナデ、内面にはヘラミガキ・黒色処理を施す有段丸底坏（第16図1・3・4）が主体であるが、口縁部が外反する丸底の器形で、内面に黒色処理が施されないもの（第16図2）も含まれる。また、有段丸底坏の中には大型のものもみられる（第16図1）。甕（第16図5）は、底部資料のため全体の器形は不明だが、内外面ともにヘラ削りが施される。この他、図示できなかったものには甕・高坏の破片資料がある。甕には、ハケメを施すものや頸部に段がみられるものがある。高坏は脚部資料で、「ハ」字形に外下方にのびるものである。

SI4竪穴住居跡では、坏（第19図1～5）が出土した。いずれも底部欠損資料のため、全体の器形は不明である。口縁部と胴部の境にわずかに稜もしくは段があるもの（第19図1・3）と段がないもの（第19図2・4）があり、口径が12～15cm、残存高1.8～3.8cmの比較的小形で皿状の器形のものが主体だが、口径20cm以上・残存高4.4cmの大型のものも含まれる。器面調整はいずれも外面に胴部ヘラ削り・口縁部ヨコナデ、内面にヘラミガキ・黒色処理を施す。

②土坑（SK4・5）・遺構外出土土師器

土坑からは、土師器が24点出土し、そのうち7点を図示した。出土した器種は、坏・甕である。

坏（第36図3〜5）は、すべてロクロ成形のもので、内面にヘラミガキ・黒色処理を施したものである。底部まで残存する資料（第36図3）もあるが、器面の磨滅がひどく、底部切り離し技法は不明である。第36図3の坏は、外面に煤が付着し、内面の器面に被熱を受け剥落している箇所が認められることから、灯明皿として利用されたものとみられる。甕には、ロクロ成形のもの（第36図1〜2・6）と非ロクロ成形もの（第36図7）がある。第36図2の甕は、ロクロ成形後、外面胴部下半にヘラ削り・内面胴部下半にヘラナデを施し、第36図6の甕は、ロクロ成形後、外面胴部下半にヘラ削りを施す。第36図7の甕は、非ロクロ成形のもので、内外面ともに口縁部にヨコナデ、胴部にヘラ削りを施している。

遺構外からは、土師器が236点出土し、そのうち2点を図示した。高台付皿（第36図9）は、内外面ともにロクロ成形で、内面が黒色処理されない赤焼土器（註1）である。台付甕（第36図10）は、非ロクロ調整の脚部資料で、磨滅がひどく器面調整については不明である。

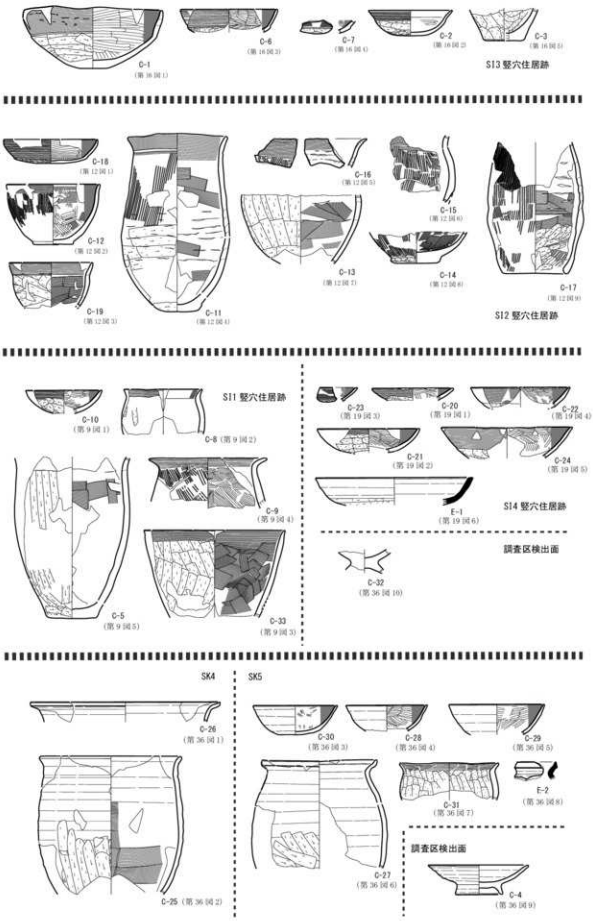
2）土師器の所属時期

①竪穴住居跡（SI1〜4）出土土師器の年代

竪穴住居跡から出土した土師器は、外面の体部〜底部にヘラ削り・口縁部にヨコナデ、内面にヘラミガキ・黒色処理を施す有段丸底坏と、外面にはハケメ・ヘラ削りを施す甕が主体である。これらは、その製作技法と形態的特徴から、栗囲式（氏家 1957）を主体としたものである。栗囲式土器を中心とする土器編年は、近年、東北・北海道地域の資料集成・広域的編年が作製されており（辻 2007）、ここでは、これらを参考にし、年代的位置付けについて検討する。

SI3出土の坏類は、外面に明瞭な段・内面に屈曲があり、口縁部が外傾して立ち上がる有段丸底坏が主体で、大型のものも含まれる。これらの坏は破片資料であるが比較的深身のものと思われる。甕は、底部資料と頸部・胴部資料が出土しており、図示できなかったものの中には、頸部に段が形成されるものもある。この他、内面黒色処理を施さない丸底で口縁部が外反する坏も1点あり、この坏は、栗囲式の前段階で主体となる形態のもので、宮城県中・南部地域、福島県中通り・浜通り地域では6世紀後半に姿を消すとされている（村田 2007・菅原 2007）。以上のことから、SI3出土土師器については、主体となる坏・甕の特徴から、栗囲式の中でも古い要素を持つ土器群と考えられ、また、全段階の要素を含む坏もわずかに含まれることから、その年代は6世紀後半〜7世紀前半頃の幅で捉えておきたい。SI2出土土師器は、口縁部が内弯気味に立ち上がる皿形化が進んだ有段丸底坏、胴部下膨れの甕、大型の甑、鉢により構成される。坏・甕・甑の形態的特徴から、7世紀中葉〜8世紀前半頃のものと考えられる。SI4出土の坏は外面に明瞭な段があるものとないものが含まれ、小型のものが主体であるが、大型のものも含まれる。この特徴から7世紀第4四半期〜8世紀前半頃のものと思われる。SI1出土土師器は、坏については、小型の丸底のもので明瞭な段が認められず、SI4出土の坏と製作技法の面で類似している。また、甕の頸部に段が認められない。以上の特徴から、これらの土師器はSI4と同様の年代幅を想定しておきたい。

亘理郡内において、今回出土した土器と類似するものは、亘理町亘理城跡（亘理町教育委員会 1982）・堤の内遺跡（鈴木 2002）・舘南囲遺跡（古川ほか 1991）・堀の内遺跡（亘理町教育委員会 1997）・宮前遺跡（丹羽 1983）、山元町狐塚遺跡（窪田 1995）・井戸沢横穴墓群（佐々ほか 1971）などで出土しているが、これらはいずれもまとまった資料ではなく、当該地域の古墳時代後期〜終末期の土師器の特徴・変遷は不明な点が多い。また、阿武隈川河口以南・阿武隈山地東側に位置する亘理郡は、地理的に福島県浜通り地方北部と隣



第40図　日向北遺跡　出土土器　(S=1/6)

接しており、特に地理的に近い相双地域との比較検討も必要であると考えられる（註 2）。以上のことから、日向北遺跡出土土師器の位置付けについては、今後、亘理・相双地域の調査事例の増加・比較を含めて、再度検討することとしたい。

②土坑（SK4・5）・遺構外出土土師器の年代

SK4・5 土坑、遺構外から出土したロクロ成形の土師器は、形態的特徴や製作技法から表杉ノ入式（氏家 1957）の範疇に含まれる。表杉ノ入式は平安時代全般に対応するものと考えられており、土師器坏類の様相からいくつかの段階に細分されている（白鳥 1980・1982、加藤 1982、柳沢 1994、村田 1994・1995）。

SK5 出土の土師器坏は、底部から内弯しながら立ち上がり、口縁端部がそのまま外上方にのび、器高が 4cm 以上の深みのある椀形の器形で、底径/口径比が 0.41 である。これらの特徴から、坏類は 9 世紀後半～10 世紀前半頃のものとみられる。SK4・5 出土のロクロ成形の甕も坏類と同様の年代幅で捉えておきたい。

遺構外出土の高台付皿は 1 点のみの出土のため、詳細な年代の位置付けは難しいが、これに類似した土器は、山元町西石山原遺跡 SI78 竪穴住居跡（初鹿野ほか 2012）で出土しており、10 世紀前半に位置付けられている。このことから、本出土の高台付皿についても、10 世紀前半頃のものとみられる。

台付甕は、脚部のみのため詳細な時期は不明であるが、7 世紀後半代まで確認されている器種であることから（村田 2007）、周辺の竪穴住居跡出土遺物と近い年代のものと思われる。

(2) 須恵器

33 点出土し、このうち 2 点図示した。出土した器種は、盤・壺・甕である。このうち、図示したものは盤 1 点と甕 1 点である。今回出土した須恵器は、出土点数がわずかでかつ破片資料であるため、その年代の明確な位置付けは難しい。このことから、ここでは、それぞれの個別の特徴からおおよその時期について検討することとする。

盤（第 19 図 6）は、SI4 竪穴住居跡から出土した。口縁部～胴部にかけての破片資料で、口縁部端部は平坦に仕上げ、胴部下半に回転ヘラ削りを施している。外面には自然釉がかかる。口径 24.8cm（推定値）の比較的大型の盤である。大型の盤については、善光寺窯跡 3・7・9 号窯などに類例があり（福島ほか 1988・木本ほか 1989）、これらは 7 世紀後半頃に位置付けられていることから、これと同様の年代を想定したい。

甕（第 36 図）は、SK5 土坑から出土した。口縁部資料のため全体の形状は不明だが、口縁端部が上下につまみあげられ口縁帯が作られている。詳細な年代的位置付けは難しいが、同一遺構から共伴している土師器の特徴から、概ね 9 世紀後半代のものと思われる。

(3) その他の遺物

その他の遺物としては、陶磁器片 5 点、鉄製品 1 点、鉄滓 1 点、土製品 1 点、瓦 1 点、石器 1 点が出土し、このうち土製品 1 点を図示した。

土製品は土製支脚（第 12 図 10）で、SI2 竪穴住居跡のカマド付設部付近の堆積土から出土した。カマド燃焼部で使用された支脚と思われ、同住居から出土した土師器と同様の年代のものとみられる。

陶磁器片・瓦片は遺構検出面（畑畝跡）・排土等から出土し、いずれも近代以降のものと思われる。鉄製品は状態が悪く器種不明である。鉄滓は表採遺物であるが、隣接する日向遺跡の調査の際も鉄滓が出土しており、遺跡周辺に製鉄関連遺構が存在する可能性が想定される。

石器は剥片で、その石材は泥岩である。

２．検出した遺構の特徴と時期

今回の調査では、竪穴住居跡４軒、掘立柱建物跡７棟、柱穴列３条、溝跡１条、土坑５基、ピット20個を検出した（第６・７図）。ここでは、これらの遺構の特徴、出土遺物、遺構の重複関係から、その時期・変遷等について検討する。

（１）竪穴住居跡

竪穴住居跡を４軒検出した。以下にその特徴と時期について検討する。

１）住居の特徴

竪穴住居跡はいずれも斜面に立地し、斜面谷側の壁が残存していない状況が確認された。残存する平面形から、いずれも隅丸方形を呈するもの想定される。

住居の規模はＳＩ１が一辺５m、ＳＩ２は一辺3.7m、ＳＩ３は一辺７m、ＳＩ４は一辺４m程と考えられる。おおよその規模は一辺４～５m前後の住居が主体で、一辺７m程の大型のものもみられた。

床面の構造は、地山を床とするもの（ＳＩ１・２・４）と、住居の一部が掘方埋土を床とし、それ以外は地山を床とするもの（ＳＩ３）がある。

カマドはＳＩ１・２・４で確認し、いずれも住居北壁に付設されている。ＳＩ３についても第Ⅲ章３で記載したとおり、北壁にカマドが付設されていた可能性がある。カマド煙道の構造は、ＳＩ２は地下式、その他の住居は不明である。

床面施設は、残存状況の悪いＳＩ４を除き、ＳＩ１～３の中央部周辺で柱穴、カマド周辺に土坑、壁際に周溝が認められた。柱穴は径30cm前後の円形を呈するものが主体である。土坑は長軸54～115cm、深さ７～14cmの円形・不整形を呈し、比較的浅い皿状のもので、ＳＩ１・２においてはカマド付設部脇に位置する。周溝は壁際を巡り、住居残存範囲において全周するもの（ＳＩ２）、部分的に途切れるもの（ＳＩ１・３）があり、いずれも人為堆積で、壁材痕跡は認められず、周溝の底面が標高の高い箇所から低い箇所へ地形にあわせて傾斜している。これらの周溝は、部分的に住居壁を外側に抉るように奥に掘り込んで構築されており（第８図・11図・13図・16図）、このような特徴的な構造は、特に標高の高い斜面側に認められた。また、周溝内では土器片が並べられた状態で出土しているもの（ＳＩ１・２）があり（第10図・14図）、出土状況から、周溝構築後に周溝掘方底面へ埋戻し土を一定量敷き詰めた後、土器片を並べ、さらにその上に埋戻し土を入れたものと判断され、周溝は住居機能時には開口していなかったものと考えられる。

このように、本遺跡で確認された竪穴住居跡では、カマド・土坑の位置、柱穴掘方の規模、床面・周溝の構築方法など、その構造において共通性が認められる。

２）住居の年代

検出した４軒の竪穴住居跡の年代は、出土した土器の特徴から、ＳＩ３は６世紀後半～７世紀前半、ＳＩ２は７世紀中葉～８世紀前半、ＳＩ１・４は７世紀末～８世紀前半頃のものと考えられる。住居は多少の時期差があるものの、前項のとおり、住居の構造に共通性が認められることから、概ね近い時期に同一集団により継続的に造られた可能性が想定される。

3）小結

以上、今回の調査で確認した竪穴住居跡についてまとめると次のとおりである。

①住居は斜面に立地する。

②住居の平面形は隅丸方形を呈し、一辺４～５ｍのものが主体である。

③床面構造は地山を床とするものが主体である。

④カマドは北壁に付設され、その脇に土坑がつくられる。

⑤周溝は住居壁を外側に挟るように奥に掘り込んで構築される特徴的な構造のもので、堆積状況・遺物出土状況から、住居機能時には開口していなかったものと判断される。

⑥住居の年代は６世紀後半～８世紀前半のもので、住居構造に共通性が認められることから、同斜面上に継続的に住居が構築された可能性がある。

4）挟れる周溝をもつ竪穴住居跡について

今回の調査で確認された竪穴住居跡では、前述のとおり、住居壁を外側に挟るように奥に掘り込んで構築された周溝（以下、挟れる周溝）が認められた。このような「挟れる周溝」をもつ住居跡は山元町内においては、合戦原遺跡（岩見ほか 1991）、狐塚遺跡（窪田 1995）などの類例が挙げられる。この他に宮城県内で同様の遺構が確認された類例としては、舘南囲遺跡（古川 1991）、十郎田遺跡（鈴木 2011）、高崎遺跡（武田 2001・島田ほか 2007）、硯沢窯跡（宮城県教育委員会 1987）、宮沢遺跡（斎藤ほか 1985）、沢田山西遺跡（須田ほか 2004）、角山遺跡（佐久間 2005）、石森館跡（佐藤 2009）などが挙げられる（第 41 図～42 図・第 14 表）。

これらの類例では、挟れる周溝をもつ住居の年代は５世紀末～９世紀前半で、その分布は宮城県内に広く認められ、これらの住居はいずれも丘陵部や丘陵裾部の斜面・緩斜面上に立地している。このことから、挟れる周溝の構造は特定の時期や地域に限定されるものではなく、斜面・緩斜面に構築された住居にみられる構造である可能性が高いと考えられ、「挟れる周溝」は住居の立地に関連性があるものと想定される。

この「挟れる周溝」については、様々な機能が想定される（註３：多ヶ谷）が、上記類例の報告においてその機能に関して特に言及されていない。本遺跡で確認された「挟れる周溝」の特徴には、①周溝堆積土が人為堆積で住居機能時に開口していない、②周溝の底面は標高の高い箇所から低い箇所へ地形にあわせて傾斜する、③壁材痕跡が認められない、④周溝内に土器片が並べられた状態で出土、などが挙げられ、③のことからも、本遺跡の周溝は壁材設置以外の目的で構築されたものと判断される。

そこで、本遺跡でみられる「挟れる周溝」と他の類例の特徴を整理すると第 14 表のとおりで、宮城県内各地で確認されている「挟れる周溝」は、堆積土が人為堆積のものと自然堆積のものがあり、壁材痕跡が認められない事例が大多数を占める。また外延溝と接続しているもの（第 14 表③・⑤・⑥・⑦、第 42 図１・４）や、周溝底面が斜面に地形に合わせて傾斜しているものもみられる。

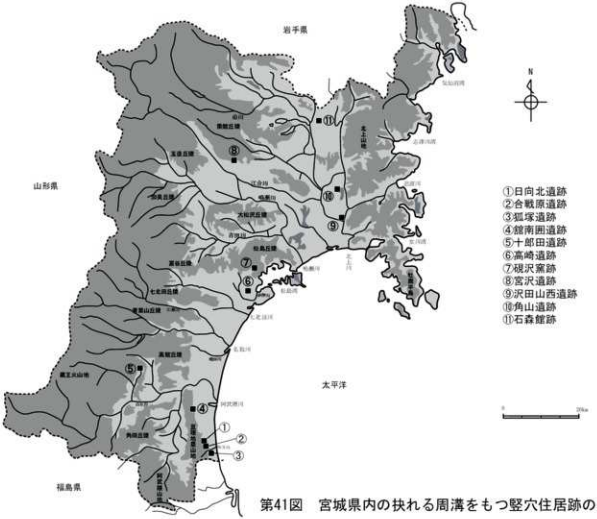
このような事例のみで「挟れる周溝」の機能を断定することは困難であるが、中には周溝と外延溝が接続しており、明らかに排水目的で構築されたと想定される事例も認められる。本遺跡では外延溝を有する住居は確認されていないが、周溝底面が傾斜していることや、壁材設置のための周溝でないこと、土器片を並べて人為的に埋戻して暗渠状にしていることなどから、排水機能を意識して構築された可能性が想定される。

なお、これらの周溝構造については現在確認事例が少数であるため、今後の資料の増加を待って再度検討を行いたい。

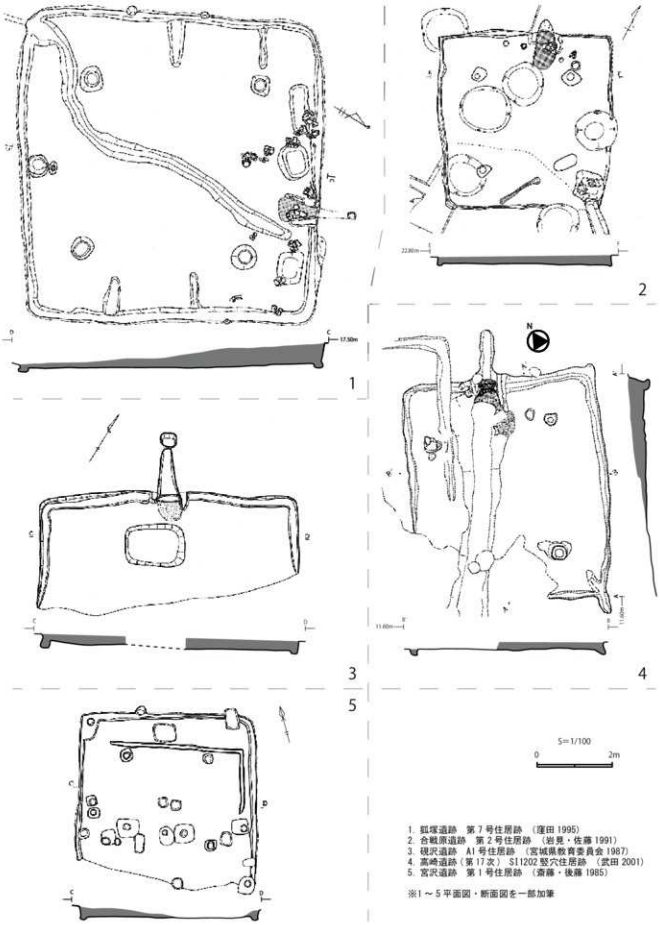
第14表　宮城県内の挟れる周溝をもつ竪穴住居

遺跡No.	市町村名	遺跡名	遺構名	時期	立地	堆積状況	壁材痕跡	周溝断面	備考
①	山元町	日向北遺跡	SI1	7c末～8c前	斜面	人為	なし	傾斜	
			SI2	7c中～8c前	斜面	人為	なし	傾斜	
			SI3	6c後～7c前	斜面	人為	なし	傾斜	
②		合戦原遺跡	1号住居跡	5c末～6c初	緩斜面	—	なし	—	
			2号住居跡	5c末～6c初	緩斜面	—	なし	—	外延溝を有するが、周溝とは接続せず
			4号住居跡	5c末～6c初	斜面	自然	なし	—	
③		狐塚遺跡	7号住居跡	7c	緩斜面	人為	なし	傾斜？	外延溝に接続
			12号住居跡	7c	緩斜面	—	なし	—	
④	亘理町	館南囲遺跡	第6号住居跡	8c前	緩斜面	—	なし	—	
⑤	鳥王町	十郎田遺跡	SI218	7c中～7c後	緩斜面	自然	なし	傾斜	外延溝に接続
⑥	多賀城市	高崎遺跡(17次)	SI1186	8c後～8c末	緩斜面？	—	なし	傾斜	
			SI1202	7c	緩斜面？	—	なし	傾斜	外延溝に接続
			SI1203	5c	緩斜面？	—	なし	平坦	
		高崎遺跡(56次)	SI1662B	8c中	緩斜面	—	なし	—	外延溝に接続
			SI1663	8c後	緩斜面	人為？	なし	—	外延溝に接続
⑦	利府町	硯沢窯跡	A1号住居跡	8c	斜面	—	なし	—	
			B7号住居跡	8c	斜面	—	なし	傾斜	
⑧	大崎市	宮沢遺跡	第1号住居跡	8c前	斜面	—	なし	—	
⑨	石巻市	沢田山西遺跡	SI34	8c後	緩斜面	自然	なし	—	
			SI55	8c後	斜面	人為	有	—	
⑩		角山遺跡	SI51	7c前	斜面	自然	なし	—	
⑪	登米市	石森館跡	SI24	9c前	緩斜面	人為＋自然	壁材抜取？	—	

※遺跡No.は第41図　宮城県内の挟れる周溝をもつ竪穴住居跡の分布と対応
※各報告書において記載がないものは「—」。記載はないが平面図または断面図観察等から想定したものを「○○？」とした



第41図　宮城県内の挟れる周溝をもつ竪穴住居跡の分布



1. 狐塚遺跡　第７号住居跡（窪田 1995）
2. 合戦原遺跡　第２号住居跡（岩見・佐藤 1991）
3. 硯沢遺跡　A1 号住居跡（宮城県教育委員会 1987）
4. 高崎遺跡（第 17 次） SI1202 竪穴住居跡（武田 2001）
5. 宮沢遺跡　第１号住居跡（斎藤・後藤 1985）

※1～5 平面図・断面図を一部加筆

第 42 図　宮城県内の抉れる周溝をもつ主な竪穴住居跡

（２）掘立柱建物跡・柱穴列跡

掘立柱建物跡を７棟、柱穴列跡を３条検出した。掘立柱建物は調査区東側の標高 22m 前後の比較的平坦な緩斜面に立地し、柱穴列は調査区中央部の標高 25m 前後の斜面に立地する。調査区中央部から東側にかけて、本来の斜面を削平し人為的に造り出された地形がみられる。この範囲に建物跡と柱穴列が分布しており、西側の斜面上に柱穴列、東側の平坦面に建物が配置される（第 20 図）。これらの建物や柱穴列を構成する柱穴の掘方規模や堆積状況に類似性がみられることから、同時期のものである可能性が高い。また、その立地や位置関係から、建物跡と柱穴列はセット関係にあるものと想定される。

１）掘立柱建物跡

掘立柱建物跡について、その規模が特定できるものは、２間×２間が１棟（ＳＢ４）、２間×１間が１棟（ＳＢ５）、１間×３間が１棟（ＳＢ６）であり、建物が調査区外へ延びているため規模不明なものは４棟ある。このうち、張出の付く建物は１棟（ＳＢ３）確認された。柱穴の規模は、柱が抜き取られたものを除き、掘方の大きさが長軸約 30 ㎝前後の円形を呈するものが多い。桁行の柱間寸法は 2.3m～5.7m とばらつきがあるものの、2.5m 前後になるものが主体である。

建物の方向については、建物西辺が真北に対して①東へ 20°前後傾くもの（Ｎ－18°～21°－Ｅ：ＳＢ１・２・４・５）、②東へ 30°前後傾くもの（Ｎ－27°－Ｅ：ＳＢ３）、③東へ 40°前後傾くもの（Ｎ－41°～43°－Ｅ：ＳＢ６・７）がある。建物はＳＢ３とＳＢ５にのみ重複関係が認められ、その新旧関係はＳＢ３（旧）→ＳＢ５（新）である。これらの建物は位置関係やその重なりから共存関係を考慮すると、６回程度の建替えがあったものと想定される。

２）柱穴列跡

柱穴列跡はいずれも南北方向に延びるものである。規模は４～５間、総長 8.9m～11.9m を測り、柱間寸法は 2.0m～2.8m の幅におさまる。柱穴列はいずれも南北方向を軸としており、真北に対して東へ 26°～29°傾く。柱穴掘方は長軸 30 ㎝前後の円形を呈するものが多い。各柱穴列に重複関係はみられないが、その位置関係から、２～３時期の建替えがあったものと考えられる。

３）小結

今回確認した掘立柱建物跡と柱穴列跡は、調査区中央部から東側に分布し、その立地や位置関係等からセット関係になるものと想定された。掘立柱建物跡は６回程度の建替えが想定され、建物の方向は３種類に分けられた。柱穴列跡は建物の西側の斜面上に立地し、２～３回の建替えが想定された。これらの掘立柱建物跡群と柱穴列がどのようなセット関係であったか現状では不明であるが、建物方向が大きく３方向に分けられること、柱穴列が最大で３時期とみることができることから、建物と柱穴列は大きく３時期にわたり変遷した可能性が想定される。

なお、掘立柱建物跡と柱穴列跡の年代については、年代の特定できる遺物が出土していないため不明であるが、柱穴の規模と周辺の遺跡の調査事例から、中～近世以降のものと想定しておきたい。

（3）溝跡

溝跡は１条検出した。ＳＤ１の明確な時期が特定できる遺物は出土していないが、後述する中～近世以降のものと思われるピットに切られていることから、ＳＤ１の大まかな年代は中～近世以前のものと考えられる。

ＳＤ１については竪穴住居の周溝の可能性を考慮して調査を行ったが、周囲に主柱穴や炉・カマド跡など住居施設の痕跡が認められなかったため、今回の報告では溝跡として扱うこととした。しかしながら、ＳＤ１はＬ字状の平面形態を呈することや、堆積土が住居跡と類似することなどから、竪穴住居の周溝である可能性を残しておきたい。

（4）土坑

土坑は５基検出した。

ＳＫ１は遺物が出土していないが、土坑東側が中～近世以降の掘立柱建物跡群を造成する際の切り土により削平を受けていることから、遺構の年代は大きく中～近世以前のものと思われる。なお、平面形が隅丸長方形であることや、堆積状況が人為堆積であることから、ＳＫ１は土坑墓であった可能性が考えられる。

ＳＫ２・３は遺物が出土していないため、その年代は不明である。

ＳＫ４・５では土師器坏・甕が出土しており、９世紀後半～10 世紀前半頃のものと考えられる。

（5）ピット

ピットは 20 基検出した。これらの多くは調査区東側の掘立柱建物跡群の周辺に集中している。いずれのピットからも年代の特定できる遺物は出土していないが、掘立柱建物群の柱穴と規模、堆積土の状況が類似することから、掘立柱建物群・柱穴列群と同じ中～近世以降のものと想定される。

ただしＰ43～45 については、ＳＫ１を囲むように配置されており、周囲に掘立柱建物や柱穴列が存在しないことから、ＳＫ１に関連する遺構である可能性が考えられる。

（6）まとめ

以上の検討から、検出した遺構のおおよその時期は次のとおりである（第 43 図）。

○古墳時代終末期前後

６世紀後半～７世紀前半：ＳＩ３

７世紀中葉～８世紀前半：ＳＩ１・２・４

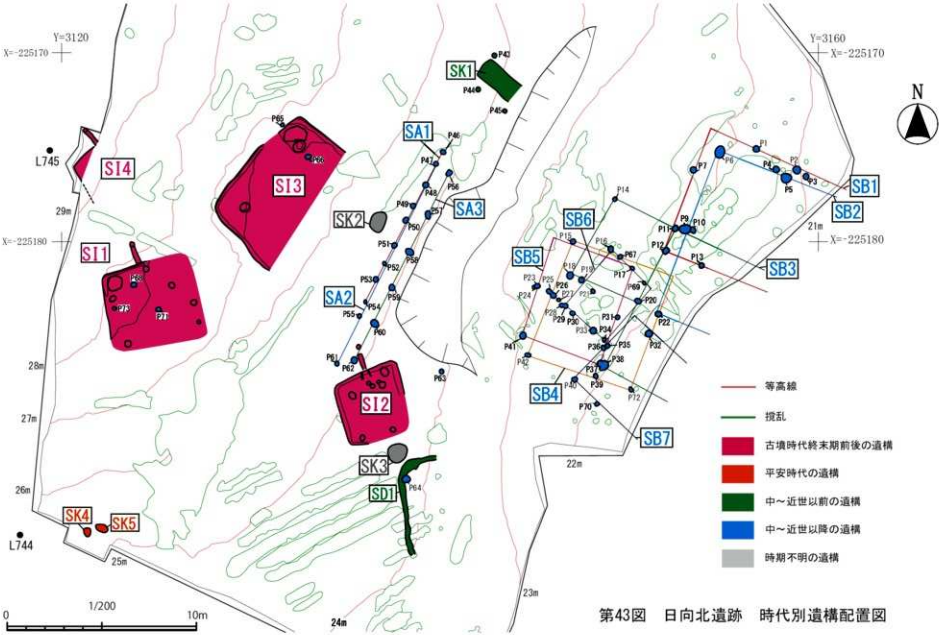
○平安時代

９世紀後半～10 世紀前半：ＳＫ４・５

○中近世以前：ＳＤ１、ＳＫ１、Ｐ43・44・45

○中近世以降：ＳＢ１～７、ＳＡ１～３、ピット群

○時期不明：ＳＫ２・３



第43図　日向北遺跡　時代別遺構配置図

3. まとめ

日向北遺跡は、宮城県南東部の阿武隈山地から東に延びる標高 20～30m の丘陵東斜面に立地する。遺跡の時期は、古墳時代～中・近世にわたるが、主体は古墳時代、中・近世である。今回の調査では、竪穴住居跡 4 軒、掘立柱建物跡棟 7 棟、柱穴列跡 3 条、溝跡 1 条、土坑 5 基、ピット 20 個を検出し、土師器、須恵器、陶磁器、土製品、鉄製品、石器などが出土した。以下、各時代の遺構について要点をまとめる。

①古墳時代の遺構には、古墳時代終末期前後の竪穴住居跡 4 軒がある。竪穴住居跡は斜面に立地し、6 世紀後半～7 世紀前半頃のものが 1 軒、7 世紀中葉～8 世紀前半頃のものが 3 軒確認され、土師器、須恵器が出土した。

②平安時代の遺構には、9 世紀後半～10 世紀前半頃の土坑 2 基があり、土師器・須恵器が出土した。この他、同時期の遺物が検出面・表土等からも出土しており、周辺に平安時代の遺構が存在する可能性がある。

③中・近世の遺構には、掘立柱建物跡 7 棟、柱穴列 3 条、ピット多数である。建物跡・柱穴列・ピットからは遺物が出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、柱穴・ピットの形状・規模や周辺の遺跡の調査事例などから中・近世に属するものと判断した。

④この他、時期不明の遺構があり、これらは古墳時代～近世にかけてのいずれかに属する遺構であると考えられる。

註

1）宮城県内において、平安時代のロクロ成形の内黒処理されていない土師器について、「赤焼土器」・「須恵系土器」等の名称で呼ばれる場合がある（桑原 1976・小井川 1984）。本稿では、原則として内黒処理・非内黒処理のものすべてを土師器として分類したが、両者を区別する際に「赤焼土器」の名称を使用することとした。

2）浜通り北部地方の 6 世紀～8 世紀の土師器については、東北古代土器研究会により集成が行われている（東北古代土器研究会 2006）が、現状では、辻秀人氏を中心とした『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成 15-18 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）研究成果報告書においては、福島県浜通り地方北部については編年案が提示されていない。菅原氏の指摘によれば、6 世紀の宮城県の住社式、福島県の舞台式について、大枠として細別器種変遷は共通していたと想定しており、今後、宮城県と福島県の中間をつなぐ等地域の資料について、改めて地域ごとの特性を検証する必要性を指摘している（菅原 2007）。

3）竪穴住居跡の周溝については、住居内の排水施設・湿気抜き、住居壁保護の壁材設置などの機能が想定されている（高橋・多ヶ谷 1998）。

引用・参考文献

青山博樹 2011「土師器の編年　⑦東北」『古墳時代の考古学Ⅰ　古墳時代史の枠組み』同成社
青山博樹ほか 2006「宮城県山元町合戦原古墳群の測量調査」『宮城考古学』2
石本弘 1995『福島県における律令制成立以前の土器様相とその背景』『東国土器研究』第 4 号
井上雅孝 1997「陸奥における 10・11 世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』第 7 号
岩見和泰・佐藤憲幸 1991「合戦原遺跡」『合戦原遺跡』『合戦原遺跡ほか』　宮城県文化財調査報告書第 140 集
氏家和典 1957「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』14
小山正忠・竹原秀雄編 1973『新版標準土色帖』2010 年版
窪田忍 1995『狐塚遺跡』山元町文化財調査報告書
小井川和夫 1984「いわゆる赤焼土器について」『東北歴史資料館研究紀要』第 10 巻
佐久間光平 2005『角山遺跡－三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅳ-』宮城県文化財調査報告書第 200 集
佐久間正明 2007「福島県における古墳時代後期土器の特質」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成 15-18 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）研究成果報告書
佐々久・志間泰治・氏家和典 1971「一　井戸尻横穴古墳群発掘調査報告書」『山元町誌』
斎藤吉弘・後藤彰信 1985『古川市宮沢遺跡－化女沼ダム建設関係Ⅰ-』宮城県文化財調査報告書第 105 集
佐藤貴志 2009『石森遺跡』宮城県文化財調査報告書第 220 集
佐藤敏幸 2007「宮城県北部・沿岸部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成 15-18 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）研究成果報告書
柴桃正隆 1974『史料　仙台領内古城・館』第四巻
志間泰治 1956「宮城県丘理郡における考古学上の遺跡」『宮城県の地理と歴史』1
志間泰治 1975『丘理の古墳』
志間泰治 2007『龜報 1　歴史を掘り起こす』
島田敏・窯瀬真理子 2007『高崎遺跡－第 56 次調査報告書-』多賀城市文化財調査報告書第 89 集
菅原祥夫 2007「福島県中通り地方南部」「福島県中通り地方中部」「福島県浜通り地方南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成 15-18 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）研究成果報告書
鈴木雅 2011『十郎田遺跡Ⅰ』蔵王町文化財調査報告書第 13 集
須田良平・相原淳一 2004『沢田山西遺跡ほか－三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅲ-』宮城県文化財調査報告書第 196 集
関敦可 2004『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第 3 集
高橋泰子・多ヶ谷香里 1998「竪穴住居に関する基本的用語」『土壁』第 2 号
多ヶ谷香里 2000「周溝とは何か-壁構築土との関連性-」『土壁』第 4 号
多ヶ谷香里 2001「周溝とは何か（2）－武蔵国府・国分寺域における検討-」『土壁』第 5 号
千葉正康 1993「狐塚遺跡」『狐塚遺跡ほか』　宮城県文化財調査報告書第 157 集
辻　秀人 1990「東北古墳時代の画期について（その 2）」『伊東信雄先生追悼考古学古代史論攷』
辻　秀人 2007「栗囲式土師器の成形方法」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成 15-18 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）研究成果報告書
辻　秀人 2007「総括」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成 15-18 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）研究成果報告書
東北古代土器研究会編 2005『研究報告 1　東北古代土器研究-古墳時代後期～奈良・集落編-（福島）』
東北古代土器研究会編 2005『研究報告 2　東北古代土器研究-古墳時代後期～奈良・集落編-（宮城）』
東北古代土器研究会編 2008『研究報告 3　東北古代土器集成-須恵器・窯跡編-（陸奥）』
福島雅儀ほか 1988「善光窯遺跡」『国道 113 号バイパス遺跡調査報告Ⅳ』福島県文化財調査報告書 192 集
本木元治ほか 1989「善光窯遺跡（二次）」『国道 113 号バイパス遺跡調査報告Ⅴ』福島県文化財調査報告書 211 集
丹羽　茂 1981「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書 77 集
丹羽　茂 1983「宮前遺跡」『杉木横横穴古墳群・宮前遺跡』　宮城県文化財調査報告書第 96 集
橋本博幸 1989「福島県相双地方の土師器」『福島県に於ける古代土器の諸問題-将に 5~7 世紀を中心として-』
初鹿野博之・山口淳・千葉直樹・大坂拓 2012『西石山原遺跡ほか-常磐自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅰ-』宮城県文化財調査報告書第 230 集
初鹿野博之 2013「宮城県山元町内手遺跡・上宮前北遺跡」『第 39 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
引地弘行 2002「館の内遺跡」『名生館遺跡ほか』　宮城県文化財調査報告書第 188 集
福島考古学会中近世部会編 2000『福島県考古学会中近世部会平成 12 年度研究セミナー　東北地方南部における中近世集落の諸問題』
藤田至則・加納博・滝沢文教・八島陸一 1988『角田地域の地質』地域地質研究報告　地質研究所
古川一明・鈴木真一郎・大和幸生 1991『舘南囲遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 144 集
文化庁文化財部記念物課編 2010『発掘調査の手引き-集落遺跡発掘編-』
文化庁文化財部記念物課編 2010『発掘調査の手引き-整理・報告書編-』
宮城県考古学会編 2010『平成 22 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会編 2011『平成 23 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会編 2012『平成 24 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会編 2013『平成 25 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県企画部土地対策課編 1988『土地分類基本調査　角田』
宮城県教育委員会 1987『硯沢・大沢窯跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 114 集
村田晃一 1992「多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』
村田晃一 1994「土器からみた官衙の終末」『古代官衙の終末をめぐる諸問題』
村田晃一 1995「宮城県における 6・7 世紀の土器様相」『東国土器研究』第 4 号
村田晃一 1995「宮城郡における 10 世紀前後の土器」『福島考古』第 36 号
村田晃一 1998「栗囲式土器の成立と展開」『考古学の方法』第 2 号
村田晃一 2007「宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成 15-18 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）研究成果報告書
柳沼賢治・佐久間正明 2005「栗囲式土器の成立過程」『日本考古学協会 2005 年度福島県大会シンポジウム資料集』
山田陵博　2008　『企画展図録　亘理郡の古墳時代』山元町歴史民俗資料館
山田陵博・村上裕次・山口淳　2010『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第 4 集
山元町史編纂委員会編 1971『山元町誌』
山元町史編纂委員会編 1986「中島貝塚」『山元町誌　二巻』

報 告 書 抄 録

ふりがな	ひゅうがきたいせき
書名	日向北遺跡
副書名	常磐自動車道（県境～山元間）建設工事に係る発掘調査報告書Ⅲ
巻次	
シリーズ名	山元町文化財調査報告書
シリーズ番号	第8集
編著者名	山田隆博・丹野修太
編集機関	山元町教育委員会
所在地	〒989-2203　宮城県亘理郡山元町浅生原字日向12-1　電話0223-37-5116
発行年月日	平成26（2014）年3月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	位置 北緯	位置 東経	調査期間	調査面積	調査原因
ひゅうがきたいせき 日向北遺跡	みやぎけん 宮城県 わたりぐん 亘理郡 やまもとちょう 山元町 やまもとあざ 山寺字 ひゅうが 日向	043621	14108	37度 58分 16秒	140度 52分 8秒	20120501～0626	1,460㎡	常磐自動車道（県境～山元間）建設工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
日向北遺跡	集落	古墳時代 終末期前後	竪穴住居跡	土師器、須恵器、土製品	竪穴住居跡4軒
	散布地	平安時代	土坑	土師器	土坑2基
	集落	中・近世	掘立柱建物跡、柱穴列、ピット	—	掘立柱建物跡7棟、溝跡5条、土坑3基、ピット多数
	散布地	時期不明	土坑、溝跡	—	溝跡1条、土坑3基、ピット3個

要約

日向北遺跡は、山元町役場の北北西約1.3kmの亘理郡山元町山寺字日向に位置し、阿武隈山地から東に延びる標高20～30mの丘陵東斜面に立地する。遺跡の範囲は、東西50m、南北75mほどの広がりをもつ。

調査の結果、竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡棟7棟、柱穴列跡3条、溝跡1条、土坑5基、ピット20個を検出した。出土遺物は、土師器、須恵器、陶器器、土製品、鉄製品、石器などである。

古墳時代の遺構には、古墳時代終末期前後の竪穴住居跡4軒がある。

平安時代の遺構には、9世紀後半頃の土坑2基がある。

中・近世の遺構には、掘立柱建物跡7棟、柱穴列3条、ピット多数である。建物跡・柱穴列・ピットからは遺物が出土しておらず、詳細な時期は不明である。

この他、時期不明の遺構があり、これらは古墳時代～近世にかけてのいずれかに属する遺構であると考えられる。

山元町文化財調査報告書第８集

日 向 北 遺 跡

―常磐自動車道（浪江～山元間）建設工事に係る発掘調査報告書―

平成 26 年 3 月 28 日発行

発 行　山 元 町 教 育 委 員 会
宮城県亘理郡山元町浅生原字日向 12-1
TEL0223-37-5116／FAX0223-37-0119

印 刷　株式会社 東 北 プ リ ン ト
宮城県仙台市青葉区立町 24-24